ロミオとシンデレラ　外伝集

目白皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロミオとシンデレラ　外伝集

【Ｎコード】

Ｎ７７９４Ｖ

【作者名】

目白皐月

【あらすじ】

拙作『ロミオとシンデレラ』の外伝的な短編をまとめたものです。先に『ロミオとシンデレラ』を読んでいないと意味がわからないと思います。ピアプロに載せているものと重複投稿になります。

わたしはいい子（前書き）

リンの長姉、ルカ視点の短編で、彼女がまだ子供の時の話です。
ちなみに……ルカが相当アレですので、そういうのでも構わない、
という方だけ読んでください。

わたしはいい子

ある日のことだった。わたしがお部屋でお勉強をしていると、パパが部屋にやってきた。わたしのパパは、大きな会社の社長さんをしている。ふだんはお仕事がいそがしいから、あんまりおうちにいないし、わたしのこともかまってくれない。

「パパ、わたしね、この前のテストで百点とったのよ」

「そうか、ルカはえらいな。ちゃんとお勉強してるのか」

でも、わたしがお勉強をして、テストでいい点を取ると、こんなふうにほめてくれる。だから、もっとがんばらなくちゃって、思う。

「次も百点取るからね」

「よしよし。ああ、ところでルカ。パパはな、ルカに大事なお話があるんだ」

大事なお話？　なんだろう。

「なあに？」

「今度な、おうちに新しいママが来ることになった」

新しいママ……。新しい、にせ物ののママが来るのね。前のにせ物のママが出て行ってから、半年。わたしにはにせ物のママだったけど、妹のハクやリンには本物のママだった。リンはまだちっちゃいから、ママがいなくなったこともわかってないみたいだけど、ハクは泣いてばっかりいる。

……あの子たちにもにせ物のママができるんだ。

「パパ、新しいママって、どんな人？」

パパは、わたしが何もわかっていないと思っている。まだ小さいから、りこんとか、さいこんとか、そういうことは全然わかっていないって。でもわたしはちゃんとわかってる。パパが前のにせ物のママとりこんして、今度の新しいにせ物のママとさいこんするんだってことぐらい。

「いい人だよ。きっとお前たちのいいママになってくれるだろう。

ルカはいい子だから、新しいママとちゃんと仲良くできるな？」
わたしはうなずいた。今度の新しいにせ物のママの前でも、いい子にしてれいぎ正しくしていろってことでしょう？　わたしはちゃんと言われたとおりにできるわ。
「わかった」
本当は新しいママなんていらないし、来なければいいって思ってる。でも、それを言ったらパパは怒っちゃう。だから、わたしはそんなことは言わないの。
わたしの、本物のママってどうしているのかな。パパに一度きいてみたけど「お前を捨てて行ったやつのことなんか気にするな」って、言われちゃった。前は信じられなかったけれど、今ならわかる。だって、前のにせ物のママ、ハクとリンを捨てて出て行っちゃったもの。
あれで、わたしは理解した。ママっていうのは、子供を捨てるものなんだって。

おやつの時間になったので、わたしは部屋を出て、下の食堂に行こうとした。あ、泣き声が聞こえてくる。……ハクが、また泣いているんだ。
ハクは、六才になるわたしの妹。ものすごい泣き虫。前のにせ物のママが甘やかしたせいじゃないのかな。それに、お勉強が全然できないの。きっと、ハクは頭が悪いんだわ。わたしはハクの部屋の前に立って、そっと中をうかがった。ハクが、パパの前で泣きじゃくっている。
「あたらしいママなんていらないよう……」
「ハク、いいかげんにしないかっ！　お前のママは、お前たちを捨てて出て行ったんだっ！　もう二度と帰って来ないっ！」
パパがハクにどなっている。バカなハク。いい子にしてれば怒られないのに、そんなこともできないんだから。わたしがハクの年に

は、もっとちゃんとしていたわ。
「だって……ママがいいんだもん……ママはどこなの？」
ハクは泣きつづけている。けっきょく、ハクはパパに「おやつぬき」を言い渡されてしまった。パパがハクの部屋から出てきそうだったので、わたしはそっとそこをはなれた。立ち聞きはいけないことだからね。
食堂に行くと、お手伝いさんが下の妹のリンにおやつを食べさせていた。リンはまだ二才。さっきも書いたけど、ママがいなくなったこともわかってなくて、今日も機嫌よくおやつを食べている。
「ルカお嬢様の分をすぐにお持ちしますね」
お手伝いさんはそう言って、食堂を出て行った。わたしはリンのほっぺたをつついてみる。
「ねえ、リン。新しいママが来るんだって」
リンは首をかしげている。言われた意味がよくわかってないんだろう。だから言ってるんだけどね。
「その新しいママに子供ができたら、きっとあんたたちはほったらかしにされるわ」
「……おねえちゃん？　どしたの？」
そういうものだもの。前のにせ物のママは、いつもわたしを放っておいて、ハクばかりかわいがっていた。だから、きっと、今度くる新しいママに、妹たちはほったらかしにされる。にせ物のママというのは、そういうもの。それがわかっているから、期待なんかしない。
また、新しい妹とかができるのかな。弟かも。どっちも別にほしくないのに。
でもいい。わたしがお勉強ができるいい子でいれば、パパはわたしをほめてくれる。ハクには無理だろうけどね。リンは、どうなるのかな。……どうでもいいわ、妹たちのことなんて。わたしには関係ないもの。

新しいにせ物のママは、想像していたのとはちがった。まず、見た目がぱっとしない。早い話、きれいな人じゃないってこと。着ているものも、そう。パパったら、どうしてこんな人にしたのかな。前のにせ物のママみたいな人が来るのかと思ったのに。

前のにせ物のママは、パパとけっこんする前は、「モデルさん」という、お仕事をしていたって、お手伝いさんが言っていた。流行のきれいなお洋服を着て、写真に映ってたんだって。でもこの人は、とてもじゃないけど、そんな風には見えない。

「長女のルカ、九才だ。こっちは次女のハク、六才。それから三女のリン、二才になったばかりだ。ルカ、ハク、リン。お前たちの新しいママになる人だぞ」

パパがわたしの背をおしたので、わたしはていねいに頭を下げた。

「初めまして。ルカです。これからよろしくおねがいします」

新しいにせ物のママはびっくりしたみたいだった。

「よ……よろしくね、ルカちゃん」

わたしはいい子だから、これくらいちゃんとできるのよ。当然でしょ。

「パパ、あたらしいママなんていらないよう。ママはどこにいったの？　ママにあいたいの」

ああ……ハクがまた泣き出しちゃった。本当に泣き虫なんだから。しょうのない子ね、泣かないでよ。パパが怒っちゃうじゃないの。

「ハク、わがまま言うんじゃない」

パパの声がぴりぴりしてる。多分またカミナリが落ちるんだわ。ハクってば、いつになったら学習するのかしら？

「やだやだやだ！　あたらしいママなんていらないの！」

すごい勢いでハクは泣きわめきはじめた。……あーあ。しくしく泣いてるだけならまだましなのに、こうなると手がつけられないのよね。本当にこまった妹だわ。

「いい加減にしないかっ！」

あ、やっぱりカミナリが落ちた。ハクが泣きながら部屋を飛び出していく。どうしようもない子だわ、本当に。
「ハクちゃん！」
新しいにせ物のママが、心配そうにそうさけんでいる。……変な人。ハクなんて、放っておけばいいのに。にせ物のママって、そういうものでしょ？
リンはこのさわぎにびっくりして、目をぱちぱちさせている。いっしょになって泣き出さないだけでもまだましなのかな。泣き声ばっかり聞きたくないもの。あれ。リンったら、新しいにせ物のママのスカートを、ひっぱっている。
「……だっこ」
ねえ、その人、だれなのかわかってるの？　小さすぎて、何もわかんないのね。
新しいにせ物のママは、リンをだきあげて、頭をなでている。……来たばっかりだから、いきなりじゃけんにもできないのね。ここではだんとかになっても困るだろうし。
「リンちゃん、初めまして」
「ハクには、後でよく言っておく。とにかく、子どもたちのことをたのんだぞ」
パパ、ハクには言ってもむだだと思うよ。

――三年後――

新しいにせ物のママ――この呼び方は長くて使いにくいので、カエさんと呼ぶことにする――が、わたしの家に来て、三年が過ぎた。わたしは小学校の六年生、ハクは三年生、リンは幼稚園の年中さんになった。
「ただいま」

家に帰って居間に行くと、カエさんが、リンをひざに乗せて絵本を読んでいた。リンったら、もう一人で絵本ぐらい読めるはずなのに、いつまで甘ったれてんのかしら。カエさんもカエさんだわ。ちゃんとにせ物のママらしくしてよ。

「こうして、王子様とお姫様は、いつまでも幸せにくらしました。おしまい」

リンがぱちぱちと手をたたいてよろこんでいる。いいわね、ちっちゃい子は。

「お帰りなさい、ルカ。学校はどうだった？」

今日もかんぺきよ。決まってるわ。

「いつもと同じ、問題ないわ」

こう答えると、カエさんは、何か言いたそうな顔になる。

「……そう」

「ママ、こんどはこっちのごほんよんで！」

リンが絵本を手にせがんでいる。……そうしていられるのも、カエさんに子供ができるまでなんだからね。

「リン、ちょっと待ちなさい。ルカ、今日はおやつにクッキーが焼いてあるの。今出してあげるわね。ハクも呼んで、みんなでおやつにしましょう」

カエさんは、おかしを焼くのが好きだ。カエさんが来てから、おやつは大体カエさんの手づくりになっている。まあいいけど。ちゃんと食べられるものを作ってくれるから。

「おやつ〜。リンね、ママのクッキーだいすき！」

リンはむじゃきにはしゃいでいる。……なんだか面白くない。なんでよ。どうしてなのよ。

カエさんはリンをひざからおろして、ばたばたと出て行った。しばらくして、クッキーを盛ったはちやティーセットが乗ったおぼんを持って、もどってきた。そんなの、お手伝いさんにたのめばすぐやってくれるのに。

「ハクを呼んでくるから、ルカ、リンがまだ手を出さないように見

てね」
　言われたことはちゃんときくわ。わたしはいい子だから。でも、呼んでもハクは来ないわよ。いつもそうでしょ？　カエさん、いつになったら理解するの？
　リンがクッキーを取ろうとしたので、わたしはその手をぺしっとたたいた。言っとくけど、軽くだからね。いい子は妹を痛めつけたりはしないの。
「つまみぐいはだめよ。ママがそう言ってたでしょ？」
　リンがうらめしそうにこっちを見る。だめなものはだめ。
　しばらくして、カエさんがもどって来た。思ったとおり、ハクはいっしょじゃない。
「ママ、ハクは？」
「……おやつはいらないんだって」
　だからいい加減におぼえてよ。あの子は、カエさんが作ったものは食べないって。この三年間、ハクがおやつを食べに来たことがある？
　カエさんはため息をつきながら紅茶をいれて、わたしの前においた。リンにはミルク。紅茶は小さな子にはしげきが強すぎる、というのが、カエさんの考え方だ。
「リンも、おねえちゃんとおなじのがいい！」
　あんたが飲んでもおいしくないわよ。
「リンはまだ小さいからだめ。ルカお姉ちゃんと同じ年になったら、紅茶をいれてあげますからね」
　カエさんが食べていいと言ったので、リンはクッキーを食べ始めた。わたしも一つ手にとる。カエさんのことは好きじゃないけど、クッキーに罪はない。
「ルカは、勉強はどうなの？」
「順調。学校の先生も家庭教師の先生も、まちがいなく志望校に入れるでしょうって」
　わたしは、今年中学受験する。受けるのは、パパが通っていた中

学だ。レベルの高い学校だけど、きっと合格してみせる。受かったら、きっとパパは喜んでくれるだろう。
「ルカは頭がいいから、きっと合格するわね。そうしたら、ごほうびは何がいい？」
……ごほうび？
「なんでも、ほしいものを言っていいのよ。パパだって、きっと喜んで買ってくれるわ」
それはそうだろう。でも……。
「いらない。ほしいものはないから」
必要なものは買ってもらっている。勉強道具も、洋服も。だからわたしに、新しく入り用になるものは何もない。
「ルカ……何もないの？　あなたくらいの年ごろなら、ほしいものがいっぱいあるんじゃないの？　本当に、なんでもいいのよ。ちょっとしたアクセサリーとか、新しいバッグとか、本当にいらない？」
カエさんはそんなことを言い出した。でも、本当にほしいものなんてない。パパがほめてくれれば、それでいい。
「本当にいらないの」
「……そう」
どうして、カエさんは悲しそうな顔をするんだろう？　変な人。わたしはクッキーを食べ終えると、カップの紅茶を飲みほした。
「ごちそうさま」
「もっと食べていいのよ？」
「もういらない。じゃあ、勉強があるから」
わたしは席を立って、階段を上がっていった。背後から、リンがカエさんにクッキーをねだる声が聞こえてくる。……最近、リンとカエさんを見ていると、なんだかいらいらする。
ああ、でも、こんなことを考えたらだめだわ。だって、わたしはいい子だから。意味もなくいらいらなんてしちゃいけないの。だって、そういうものでしょう？

わたしはいい子（後書き）

……そんな子はトカゲになっちゃいますよ。

この、『ロミオとシンデレラ』のノベライズで、一番割を食っているキャラクターはルカです。もともと補助線として配置していたから、仕方のない側面があるんですが。

ちなみに、この設定は考えたものの、本編の中で出すことはなさそうなので、ここに書いてしまいますが、ルカの実母はルカを捨てて出て行ったのではありません。

ママ、かえってきて（前書き）

リンの次姉、ハクの視点で、彼女の実母が出て行く前～出て行った後のエピソードです。

年齢を考えてひらがなばかりにしたので、読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。

ママ、かえってきて

さいきん、ママがなにかおかしい。ぜんぜんあそんでくれないし、かなしそうなかおばかりしている。

「ママ、きょうのおやつはなに？」

「……」

「ママ、あたし、ママとおでかけしたい」

「……」

「ママ、リンがさっきからないてるよ。どこかぶつけたみたい」

「……」

ねえ、ママ。どうして、おへんじしてくれないの？　どうして、こっちをみてくれないの？　ママ、あたし、なにかいけないことしたの？

「ねえ、ママ、ママってば！」

「……ハク、むこういってなさい」

あたしは、ママのへやからおいだされてしまった。どうしてママは、あたしとあそんでくれないんだろう？　ちょっとまえまでは、たくさんあそんでくれたのに。

なみだがでてきた。あたしがなきながらろうかをあるいていると、あいたくないひとにあってしまった。あたしたちの「かていきょうし」とかいうひと。あたしとおねえちゃんに「おべんきょう」をおしえるのが、このひとのおしごとなのだ。

「ハクおじょうさま、こんなところにいたんですか。おべんきょうのじかんですよ」

「おべんきょうなんかしたくないもん……」

「わがままをいうんじゃありません」

かていきょうしはあたしのてをつかんで、おべんきょうようのへやへとひきずっていった。おべんきょうのへやには、おねえちゃんがいて、ノートにせっせとなにかかいている。

「ほら、ルカおじょうさまはああやってまじめにおべんきょうされてますよ。ハクおじょうさまも、ルカおじょうさまをみならって、ちゃんとおべんきょうしましょうね」
おねえちゃんがこっちをちらっとみた。……おねえちゃんなんか、だいっきらい。
おねえちゃんは、「かんぺきないいこ」だ。「かんぺき」ということばのいみはよくわからないけれど、パパもかていきょうしも、おねえちゃんのことを「かんぺきないいこ」といって、ほめている。おねえちゃんは、いつもちゃんとおべんきょうしていて、おべんきょうができて、おぎょうぎがよくて、いたずらなんてぜったいやらないから「かんぺきないいこ」なんだって。「みならいなさい」って、ふたりによくいわれる。みならって、「かんぺきないいこ」になりなさいって。
ママだけは、おねえちゃんをみならわなくてもいいといってくれた。ママがいうにはおねえちゃんは「かんぺきすぎるいいこ」で「きみがわるい」って。おねえちゃんのまねなんかしなくても、あたしは「かわいい、いいこ」だって、そういってくれた。……ちょっとまえまでは。
いまは、ママは、かなしそうなかおをしているだけで、あたしのことを「いいこ」とは、いってくれない。
しかたがないので、あたしは、ノートをひらいておべんきょうをする。おべんきょうはきらいだけど。かていきょうしが、あたしのノートをみて、ためいきをついた。
「ハクおじょうさま……じはもっとていねいにかきなさいと、なんどいったらわかるんですが。それに、ふちゅういからくるまちがいもおおいです。まったく……やはり、もともとのできがちがうんですかねえ。ルカおじょうさまは、これくらいのねんれいのときから、ちゃんとできていたんですが」
あんたもだいっきらい。おねえちゃんもあんたも、いなくなっちゃえばいいのに。

「ねえ、ママ。でかけるの？」
「そうよ」
「あたしもいっしょにいく！」
「ハクはだめ。おべんきょうがあるでしょう？　おるすばんしていてね」
「おべんきょうなんかやだ！　ママといっしょがいい！」
このごろ、ママはよくでかけるようになった。きれいにおめかしして、くらくなるまでかえってこない。
まえは、おめかししてでかけるときは、あたしもつれていってくれた。あたしもきれいなふくをきせてもらって、かみにリボンをむすんでもらって、デパートやレストランにつれていってもらっていた。あたしとママがそうしていると、とおりかかったひとが「かわいいおじょうさんですね」っていってくれて、ママはとてもうれしそうに「ええ、そうでしょう」っていっていた。
でも、さいきん、あたしはつれていってもらえない。ずっとおうちでおるすばん。つまんない。
「おべんきょうなんかつまんない。ママといっしょにおでかけしたい！」
ママはためいきをついて、あたしのあたまをなでた。
「きょういくところは、こどもをつれていけないの。ハクのすきなケーキをかってきてあげるから、おるすばん、おねがいね」
ケーキなんかより、ママといっしょがいい。でも、ママはでかけていってしまった。あたしをおいて。

あるひ、あさおきたら、ママがいなくなっていた。
「ママ？　ママ？　どこにいるの？」
あたしはひろいいえじゅうをはしりまわって、ママをさがした。

でも、どこにもいない。
「ねえ、ママはどこにいるの？」
おてつだいさんにきいてみたけれど、こまったかおであたしをみるだけだった。ママはどこにいるんだろう？　そこへ、おねえちゃんがやってきた。
「おねえちゃん、ママはどこ？」
「しらない」
「ねえ、いっしょにさがして」
「だめよ。これからべんきょうするんだから」
おねえちゃんは、いってしまった。……おねえちゃんは、いつもそう。もしかして、ママのことが、きらいなのかな。……きっとそうだ。
「ママ……」
あたしがすわりこんでなきじゃくっていると、パパがやってきた。
「ハク、かていきょうしのせんせいがさがしていたぞ」
……ママじゃないの？
「ねえ、パパ。ママはどこにいるの？」
あたしがそうきくと、パパのかおがきゅうにこわくなった。
「……でていった」
どういうこと？
「でていったって？」
「おまえのママは、このいえをでていったんだ。もうもどってこない」
あたしは、パパのいうことがよくわからなかった。ママがいえをでていって、もうもどってこないって……。そんなのおかしいよ。
「パパ、なんでママはでていったの？　ここはパパとママとあたしとおねえちゃんとリンのいえだよね？　どうして、ママがでていくの？」
あたしがそうきいたら、パパはおこりだした。
「でていったといったらでていったんだっ！　いちいちせんさくす

るんじゃないっ！」
　ものすごくこわいこえだった。あたしはこわくなって、そのばからにげだした。じぶんのへやにかけこんで、ベッドにとびこんで、ずっとないていた。
　そうやって、ないて、ないて、ずーっとないて、そのままねむってしまった。ねむってしまったあたしは、ゆめをみた。ママのゆめ。ゆめのなかのママは、わらってあたしのあたまをなでてくれた。とてもしあわせなゆめだったから、さめてほしくなんかなかった。
　めがさめるとやっぱりママはいなくって、あたしはもういちどないた。

　どうして……。
　どうして、ママはでていっちゃったの？
　あたしをおいて、いっちゃったの？
　あたしもつれていってほしかったのに。
　あたしがママにあいたいってなくと、パパはおこる。
　おねえちゃんは、ママがいなくなっても、へいぜんとおべんきょうをしている。
　リンは、ちっちゃすぎて、なにもわかっていない。
　ママ、おねがい、かえってきて。あたし、ママといっしょがいいの。
　ママさえかえってきてくれたら、あたし、ほかにはもう、なにもいらないから。

　けっきょく、ママは、かえってこなかったし、あたしをむかえにきても、くれなかった。
　それどころか、このいえには「あたらしいママ」がやってきた。あたしの、ほんとうのママとは、にてもにつかないママ。そのひと

は、あっというまにいえにはいりこんで、まえからいたみたいに、ふるまっている。
あんなひとがいたら、ママがかえってこれないじゃないの！
だからあたしは、あのひとのことを、ぜったいにママとはみとめないことにした。

ママ、かえってきて（後書き）

「最低な家庭教師」って思った人もいそうです、この話。
まあ、そんなの雇ってる時点で、ここの家は問題だらけってことなんですが。

ハクとリンの実母が出て行った理由は、そのうち本編の方で出てくる予定ですが、勘のいい人なら、もうわかっちゃってるでしょうね。

やさしいうそと、むごいうそ（前書き）

これは、外伝その二『ママ、かえってきて』から、三年後のハクを書いたもので、こちらもハク視点となっています。
三年生になったので、少し漢字が増えました。

やさしいうそと、むごいうそ

あたしたちの、新しいママだという、カエさんという人が来て、三年がたった。

そして、あたしは、いらいらしている。

おもしろくないのは、リンのことだ。リンはあたしの妹で、あたしより四つ下。ママがいなくなった時、リンはまだ二つで、何もわかっていなかった。

だからなのか、リンはカエさんのことを、本物のママだって思っているみたい。カエさんの後をついて回るし、カエさんのひざにすわって絵本を読んでもらうし、カエさんがおかしをやくときは、よろこんでお手つだい（といっても、リンがそう言っているだけで、大して役には立っていない）をしている。

今日こそは、本当のことを話さなくちゃ。あたしたちの本当のママは、べつにいるんだって。カエさんがいるから、帰ってこれないんだって。

「リン」

あたしは、リンの部屋に行った。リンは、おままごとの道具を広げて、ぬいぐるみと遊んでいる。

「ハクおねえちゃんだ〜。うさちゃん、ごあいさつしましょうね〜」

そう言ってリンは、ぬいぐるみにおじぎをさせた。

「リン、大事な話があるの。だから、まじめに聞いて」

リンは首をかしげている。

「だいじなおはなし？」

「そう、大事なお話」

リンはぬいぐるみをひざにのせて、すわりなおした。聞く気はあ

るみたい。あたしは、大きくいきをすいこんだ。
「あのね、リン。カエさんはね、あんたの本当のママじゃないの」
「それ、えほんのおはなし？」
ちょっと、どうしてそこで絵本がでてくるのよ。カエさんがまい日のように、リンに絵本ばっかり読んで聞かせてるせいだわ。
「ちがうわよ。本当の話。あたしとあんたの本当のママは、カエさんじゃないってこと。わかる？」
リンはふるふると首を横にふった。ああもう、リン、たのむからちゃんとわかってよ。
「だからね、あたしもあんたも、ついでに言うとルカお姉ちゃんも、みんな、今のママの子じゃないってこと！」
さいきん知ったことだけれど、お姉ちゃんのママはまたちがう人らしい。だから、お姉ちゃんは、ママのことがきらいだったんだ。
「リン、わかんない。だって、ママはママでしょ？」
「だからちがうの！　あたしとあんたをうんだのは、カエさんじゃないの！　本当のママは、べつにいるのよ」
あたしがいくら言っても、リンは首を横にふるだけだ。
「わかんない」
「わからないふりしてるだけでしょ、あんたは」
「ほんとうにわかんないんだもん！」
「だから！　カエさんはあんたのママじゃなくて、まま母ってやつなの！　シンデレラいじめてるあれといっしょよ！」
リンは『シンデレラ』のお話が好きだ。このたとえならリンでもわかるだろう。
「ちがうもん！　ママはそんなのじゃないもん！　リンのママだもん！　リン、ハクおねえちゃんなんかきらい！　リンがわかんないことばっかりいうんだもん！」
リンはそう言って、部屋を飛び出して行ってしまった。……しまった。あたしは、あわてて後を追いかけた。リンはばたばたとろうかを走って行く。

「リン、まちなさいってば！」
もちろん、リンは止まってなんてくれなかった。そのまま、階だんを走って下りて行く。そして次のしゅんかん、聞こえてきたのはリンのさけび声と、何かがゆかにぶつかる音だった。……そんな！
あたしはおそるおそる、階だんから下をのぞいてみた。リンがゆかにたおれていて、まったく動かない。……足をふみはずして、階だんから落ちちゃったんだ。あんないきおいで走ったりするから……。
「リン！　リン！　何てこと！」
カエさんが悲めいをあげながらかけよってきて、リンをだきおこした。
「だれか来て！」
お手つだいさんや、運転手さんがやってきた。そして、カエさんはリンをだいたまま、運転手さんといっしょに、家を出て行った。
あたしは急にこわくなって、自分の部屋にもどった。どうしよう……リンにけがをさせるつもりなんかなかったのに。ただ、本当のことを、知っておいてほしかっただけなのに。
なんで、走り出したりなんかしたのよ。……リンのバカ。

しばらくすると、カエさんがリンをつれてもどってきた。リンはあちこちにほうたいをまかれていて、そのまま部屋のベッドにねかされた。
あたしは、リンの部屋の外で、ようすをうかがっていた。カエさんが、お手つだいさんに話す声が聞こえてくる。
「さいわい、うちみとすり傷だけですんだわ。ほねにひびも入ってないし、頭の方も、いじょうはありませんって。でもまだ不安だし、今日のところはおとなしくねかせておきましょう」
「おくさま、このあとは」
「わたしはしばらくリンについているから、あなたたちは、ルカと

ハクをおねがい」
おてつだいさんが部屋からでてきたので、あたしは声をかけてみた。
「ねえ……リンは、だいじょうぶなの？」
「だいじょうぶだそうですよ」
あたしは部屋の外から、中をのぞいてみた。リンがベッドにねていて、カエさんはまくらもとのいすにすわって、リンの手をにぎっている。
どれくらいたったのか。リンが目を開けた。
「……ママ？」
「リン、だいじょうぶよ。お医者様も、だいじょうぶって言ってくれたわ」
リンは身動きして、いたそうに顔をしかめた。
「今日のところはおとなしくねてなさい。それと、もう、階だんを走ったりしちゃだめよ。あぶないでしょう？」
「ねえ、ママ……ママはリンのママだよね？」
立ち聞きしていたあたしは、はっとなった。カエさんも、びっくりしたような顔になる。
「リン、どうしたの？」
「ハクおねえちゃんがね、へんなことといったの……ママはほんとうのママじゃなくて、ままははなんだって……」
カエさんは、今度はこまった顔になった。……本当のことだもの。カエさんが、リンをうんだんじゃないってことは。
「ママ？」
「あのね、リン……ママはね、リンのことが大好きだし、とても大事に思ってるわ」
そう言って、カエさんはリンの頭をなでた。
「だからね、リンはそういうことを、考えなくてもいいの。リンがママのことをどう思おうと、ママはリンのことは、大事なむすめで、かわいいたからものだって思ってるから」

……ずるいよ、そんな答え。なんで、そんな返事をするの？　あたしは、リンの部屋の前をはなれて、階だんを下りて行った。
一階のホールに行くと、げんかんのドアが開いて、お姉ちゃんが帰ってきた。お姉ちゃんは六年生だから、あたしより帰りがおそい。
「ただいま」
お姉ちゃんはそう言うと、いまへと入っていった。そうして、すぐに出てくる。
「ハク、カエさんは？」
「……リンの部屋。リンがけがをしたから、ついてるって」
「けが？　リン、どうかしたの？」
「階だんから落ちたの」
お姉ちゃんはふーんとだけ言って、そのまま二階へとあがっていった。あたしも、その後をおって、もう一度二階にあがる。
お姉ちゃんはリンの部屋の前に行くと、外から「今帰った」とだけ声をかけて、まっすぐ自分の部屋へと行ってしまった。
あたしが、お姉ちゃんの部屋に入ると、お姉ちゃんは学校のお道具をかたづけているところだった。
「何か用？」
「リンの様子見ないの？」
「家にいるってことは、そんなおおごとでもないんでしょう？　カエさんもついているんだし、べつにいいわ」
それが、お姉ちゃんの答えだった。
「わたしは、受けん勉強があるからいそがしいの」
お姉ちゃんは、今年「受けん」とやらをするのだそうだ。しけんを受けて、もっとむずかしい学校に行くんだって。お姉ちゃんが受けんしたいって言い出したとき、パパは大よろこびだった。
「お姉ちゃんは……」
「なに？」
「あたしやリンのこと、きらい？　ママがちがうから、きらいだったりする？」

「……べつにきらいじゃないわ」
お姉ちゃんはそう答えた。……きらいじゃないの？　あたしはずっと、お姉ちゃんはあたしやリンがきらいなんだと思っていた。
でも……そう言われても、ちっともうれしくなんてなかった。むしろ、きらいって言われた方が、よかったかもしれない。
「本当に？」
「ええ。きらいじゃない」
「じゃあ、カエさんは？」
「……どうでもいいわ、あの人のことは」
「つまり、きらいなの？」
「だからどうでもいいの。そういう感じょうを、あの人にはもってないから」
お姉ちゃんの言うことがよくわからない。
「勉強のじゃまだから、出て行って」
お姉ちゃんにそう言われたので、あたしはお姉ちゃんの部屋を出て、自分の部屋にもどった。

自分の部屋にもどったあたしは、つくえのひきだしをあけた。中から、大きめのはこをとりだす。はこの中には、もう一つはこが入っている。そして、その中に、さらにもう一つのはこ。そのはこをあけて、あたしは中から、一まいの写真を取り出した。うつっているのは、あたしとママ。
この写真は、あたしとママが二人でお出かけした時に、とってもらったものだ。ママがいなくなった後、パパはママの写真をみんなすててしまったけれど、これだけは、あたしがもらっていたので、ここにのこっている。
「ママ……」
あたしは、写真の中のママに話しかけた。
「リンはね、ママのこと、ぜんぜんおぼえてないよ。本当のこと、

教えてあげようとしたけど、だめだった」
　これを見せたら、しんじるかな。……ううん、きっと、むりだ。だって、リンがうつってないもの。リンもうつっている写真が、あればよかったのに。

　ママの写真をはこにもどして、あたしはもう一度部屋を出た。すると、カエさんが歩いてくるところに出くわしてしまった。あたしは部屋にもどろうとしたけれど、それよりも先に、カエさんの方があたしに気づいた。
「ハク？」
　あたしは部屋にもどるのをあきらめて、しぶしぶ、カエさんの前に立った。
「なあに？」
「ちょっといい？　リンからきいたんだけど……」
　……やっぱり、その話なんだ。あたしはわるい子って、これからしかられるんだ。本当のこと、教えてあげようとしただけなのに。
「そうよ！　あたしが言ったの！　あたしが！　カエさんはリンの本当のママじゃないって！」
　あたしがさけぶと、カエさんはためいきをついて、あたしの前にしゃがみこんだ。
「どうして、そんなことを言ったの？」
「だって、本当のことだもの！　カエさんはあたしとリンのママじゃない！」
「あのね、ハク。リンはまだ小さいの。そんなことを言われても、わからないわ」
「だからって、うそを教えるの？　うそはいけないことだって、いつも言ってるじゃない」
「時と場合によるの。リンがもっと大きくなったら、ちゃんと本当のことを話すつもりだから……」

「どうせ、それもうそでしょ。この家は、うそばっかり！」
「ハク……」
あたしは自分の部屋にかけこんだ。……カエさんは、ずるい。だから、あたしは、カエさんがきらいなんだ。
でも……リンにこの話をするのだけは、とうぶんやめておこう。リンがもっともっと大きくなって、きちんとあたしの言うことをわかるようになってからにしないと。……もう、階だんから落ちるリンは、見たくないから。

やさしいうそと、むごいうそ（後書き）

なんか、この話のリンはひっくり返るとか、怪我するとか、そんな目にばかりあっていますね。

別に怪我させたいわけじゃないはずなんだけどな……。

クオの決意（前書き）

クオとミクが中学三年の時のエピソードで、クオがミクの家に預けられたばかりの頃を書いています。

クオの決意

「クオはどこを受験するんだ？」
俺が伯父さんの家に預けられて数日後、伯父さんは俺にそんなことを訊いてきた。
「実はちょっとそれで悩んでて……」
俺も一応、志望校については漠然とながら考えてはあったし、親にも相談はしていた。だが、中二の春休みに、降って湧いた両親の海外赴任話。赴任先に俺は連れて行けない――一応それも考えたらしいが、俺は今年から受験生なので、日本に残しておいた方がいいだろうということになった――ということで、俺は伯父さんのところに預けられることになった。
伯父さんの家はもともと俺の家とはかなり距離があり、結果として俺は転校することになった。両親は最低でも三年は日本に帰って来れない。となると、伯父さんのところから通える高校に通うことになる。まあそんなわけで、俺は色々と考え直さなければならなくなったのだった。
「何か相談があるのなら遠慮せずに言いなさい」
「……あ、うん、そうする」
「クオ、そんなに固くならなくていいぞ」
いやでも……。なんか、あまりにも色々とされちゃって、逆に申し訳ない気がどうしてもつきまとってくる。部屋は広いし、飯は豪華だし、小遣いも多いし……。
「何なら、ミクと同じ高校を受けたらどうだ」
不意に、伯父さんはそんなことを言い出した。
「いい学校だぞ。伯父さんもあそこを出たからわかる」
「ミクは伯父さんの出身校を受けるんだ」
「いや、ミクは既に中等部に在籍しているからな。あそこは内部生は受験無しで上にあがれるから、受験はしない」

ふーん、ミクの奴は高校受験しなくていいのか。ちょっと羨ましいぞ。その代わりに小学校の時に受験したわけだけど。俺もそうしておけば良かったかなあ。でも、俺の周りって、あんまり私立校受験する奴いなかったんだよな。それに、公立なら歩いて通えるしさ。
でも高校ともなると、近場を基準にってわけにもいかないよなあ。俺も真面目に考えないと。

伯父さんとの話を終えた俺は、ミクの部屋に行ってみることにした。現在進行形で通ってるわけだから、学校のことにも詳しいだろう。
部屋に行ってみると、ミクは椅子にかけて漫画を読んでいた。
「ミク、ちょっといいか？」
「……ダメ」
おいこら、何だその返事は。
「漫画読んでるぐらいだから暇だろ、お前」
「もうじきお客さんが来るの」
……客？
「客って誰だ」
「友達。来たら部屋で二人でお喋りする予定なんだから」
なんで女ってこう、喋るのが好きなんだ？　そう思った時だった。ミクの部屋のドアをノックする音がした。
「お嬢様、お客様がお見えですよ」
「あ、は～い、今行くわ」
ミクは漫画を本棚に戻すと、さっさと部屋を出て行ってしまった。
……俺も後を追う。
玄関ホールに行くと、ミクと同じぐらいの年齢の女の子が立っていた。……綺麗な子だな。ミクと並ぶとアイドルユニットみたいだ。
この子がミクの言っていた友達か。
「リンちゃん、いらっしゃい」

「ミクちゃん、おはよう。これ、お母さんが持って行きなさいって」
リンちゃんと呼ばれた女の子は、ミクに紙袋を手渡した。
「何だろう……あ、マカロンだ。美味しそう！　じゃ、おやつにね」
ミクはお手伝いさんに、紙袋を手渡した。それから振り向いて、少し離れたところに立っていた俺に気づく。
「あ、クオ、紹介するわ。わたしの友達の巡音リンちゃん。幼稚園の時からの友達なの。リンちゃん、こっちは、わたしの従弟の初音ミクオ。前に話したと思うけど、わたしの家でしばらく一緒に暮らすことになったの」
ミクの幼馴染の巡音さんとやらは、俺を見て、おどおどと頭を下げた。
「……初めまして。巡音リンです」
「初めまして。初音ミクオだ」
巡音さんは、うつむいて黙っている。おーい、何か言ってくれ。どうもミクとは対照的なタイプらしい。
「それじゃーね、クオ」
ミクは巡音さんと一緒に、自分の部屋に行ってしまい、俺は取り残された。

この日はずっと、ミクは巡音さんと一緒だった。二人は午前中は自室でお喋りをし、その後は一緒に昼食を食べ、午後からは映画のＤＶＤを鑑賞して、それから居間でティータイムとやらを過ごしていた。えらく楽しそうだな……。「男は近寄るな」オーラが出てるような気もするが。
「あ、クオ」
こっそり様子を伺っていたつもりだったが、気づかれてしまった。どうしたらいいんだ？
「ねえ、クオもこっちに来て、リンちゃんが持ってきてくれたマカロン食べない？　美味しいわよ」

あっけらかんと手招きして、ミクはそう言った。ちょっとほっとしたぞ。
「マカロンねえ……」
俺は居間に入って、椅子の一つに腰を下ろした。テーブルの上には、外国の映画にでも出てきそうなティーセットが置いてある。……しみじみ、俺とは縁遠い世界だ。ミクはお手伝いさんを呼ぶと、俺の分のカップを持ってきてくれるように頼んでいる。
「マカロンってこういう奴だっけ？」
目の前にあったのは、刻んだナッツの入った地味な焼き菓子だった。あんまり食べた記憶ないけど、マカロンって、確かもっとカラフルじゃなかったっけ。
「それはマカロン・パリジャンね。これは違う種類なのよ」
そんなことをミクは言った。へーえ。あれってそんなに種類があるものなのか。俺はマカロンを一つつまんで口に入れてみた。あ、確かに美味しい。
「美味いな、これ」
「リンちゃんのお母さんの手作りなの。リンちゃんのお母さん、そこらのパティシエよりずっと、お菓子焼くの上手なのよ」
ミク、どうしてそこでお前が自慢気になるんだ？　お前の手柄じゃないだろ、それ。巡音さんは、自分の席でもじもじしている。
「ミクちゃんはいつも喜んでくれるから、お母さんも嬉しいって……」
「リンちゃんのお母さんのお菓子なら、いつでも大歓迎だから。この前のプリンも美味しかったし、あの……なんだっけ、白っぽい冷やし菓子」
「……クレメンダンジェ？」
「そう、それ！　あれも美味しかったわ」
……全っ然会話に入れやしねえ。つーか、プリンはわかるが、クレメンダンジェって、なんだそれ。舌噛みそうな名前だ。
女の子二人は、甘いものについてそのままずっと話を続けた。俺

には全く割って入るチャンスなどなく、ぼーっと紅茶を啜りながらマカロンを齧っていた。……言っとくけど、別に淋しいとかじゃないからな。

ティータイムとやらが終わると、巡音さんは帰って行った。あ～、なんかどっと疲れたぜ、俺は。

「そう言えばクオ、朝は何か用事あったの？」

そんなことを訊いてくるミク。あ、最初の用事をすっかり忘れかけていたぞ。……これもお客さんとやらのせいだ。……うん、わかってるよ、今のは八つ当たりだって。

「お前の学校について聞かせてもらおうと思ってたんだけど」

「わたしの学校？　どうして？」

「伯父さんが、そこを受けたらどうかって言っててさ。どんな感じなのか知りたいと思って」

ミクは頬に手を当て、考え込んだ。

「そうねえ……学校としてはいい部類に入ると思うわ。制服は可愛いし、校則もそんなにきつくないから。リボンやバレッタがＯＫって学校、あんまり無いのよねえ」

「どうして真っ先にそれなんだよ」

「だって、大事なポイントでしょ？」

訊く相手を間違えたような気がしてきたぞ。

「ちなみに、男子の髪型も割と自由よ」

へえ、そうなのか。

「でもねえ……クオが入るのはちょっと大変かも」

おい、それは暗に俺がバカだと言いたいのか。幾ら俺でも怒るぞ。

「うちの学校、高等部の枠はそんなに多くないのよ。中等部からそのまま持ち上がる生徒が多いから。それに、実績出してる進学校でしょ。だから受験者も多いのよね」

……そういう意味か。あれ、ちょっと待てよ？

「ミク、お前の通ってる学校って」
「私立榛崎中学よ。知ってるでしょ」
「共学だよな？」
「ええ。じゃなきゃ、クオは入れないわ」
確か……ミクって、小学校の時は私立の女子校に通ってなかったっけ？
「お前ってさ……確かエスカレーター式の女子校に行ってたんじゃなかったか？　伯母さんがずいぶん前に、うちの母親にそういう話をしていたはずだけど」
幼稚園の時からそこのはずで、入れるのが大変だったとかそんな話だ。うちの母親は「うちは公立だから気楽よ～」って笑ってたけど。
「ええ。小学校まではね」
「そこなら、大学までずーっと持ち上がりだろ？　なんで受験までして別の中学に行ったんだ？」
何も好き好んで苦労することないじゃないか。そんなに女子校が嫌だったんだろうか……。
「ん～大した理由じゃないんだけど」
「なんだよ」
「リンちゃんが受験するって言ったから、わたしも一緒に受けたの」
俺は唖然となった。
「おい、なんだその理由は？」
「え？　いけない？」
「いけなくはないが……」
そんな理由でほいほい中学受験なんかしたのか、ミクの奴は。友達と一緒の学校に行きたいというだけで？
「だあってリンちゃんと同じ学校に行きたかったんだもん！」
堂々と胸を張ってこっちを見るミク。……そういう態度取られると、何も言えやしねえ。はあ。
あれ、待てよ？

「お前、さっき、幼稚園からのつきあいだって言ってたよな？」
「そうよ」
「向こうは、なんで受験したんだ？」
ミクは首を傾げた。
「それはねえ……」
「うん？」
「ひ・み・つ」
なんだよその台詞は。
「ミク、お前、俺のことバカにしてんのか？」
「そんなわけないじゃない」
「いーや、バカにしてるだろ」
「バカになんかしてないわよ。ちょっとからかってみたのは認めるけど。でも、クオにリンちゃんの事情をぺらぺら喋るわけにはいかないの。リンちゃんはわたしの友達で、クオとは直接関係が無いんだから」
あっ……。それもそうか。確かに、今日会ったばかりの俺に、ミクのことならともかく、あの子のことをあれこれ詮索する権利は無いよな。
……ミクの奴、意外と友達思いなんだ。
「そうだったな……ごめん」
謝ると、ミクはにこっと笑った。
「わかってくれたらいいの」

ミクと別れて自分の部屋に戻ろうとした時、俺は、伯父さんが書斎から出てくるのに気づいた。
「伯父さん！」
「クオ、どうしたんだ？」
「俺……ミクと同じ高校を受けてみようかと思うんだ。ミクの話だと、いい学校みたいだし」

俺がそう言うと、伯父さんは嬉しそうな表情になった。
「そうか。実際、いい学校だぞ」
合格したら、来年の春からミクと一緒の高校生活か……どんな感じになるんだろ。
「じゃあクオ、明日から特訓だな」
「へっ？」
伯父さんが当然のことのようにそう言ったので、俺は間の抜けた声をあげてしまった。
「特訓って？」
「受験するからには絶対合格したいだろ？　それに、クオの今の成績だと、榛崎はちょっと厳しいからな」
うっ……ミクならともかく、伯父さんに言われると反論できない……。
「心配しなくていい。優秀な家庭教師をつけて、みっちり鍛えてあげるから。クオは頭はいいから、やればできる。来年の今ごろは、ミクと一緒に榛崎に通ってるさ」
俺はこの時、少しばかりこの選択を後悔した。とはいえ、もう遅い。伯父さんはすっかりやる気になっている。
ええい、やるしかないだろ！　見てろよこの野郎！

――その年の夏――

「もうダメだ……死ぬ……」
俺は大量の課題を前に、半死半生の気分だった。
「あらあらクオ君、音を上げるなんて、らしくないわよ。はい差し入れ」
ジュースとパンを持ってきた伯母さんが、のほほんとそんなことを言った。俺は冷えたジュースを一口、口に含んだ。あ～、生き返る～。

「思い出すわねえ。三年前、ミクがこんな風にぐったりしてたの」
相変わらずのほほんとした口調で、伯母さんはそう続けた。
「へ？　ミクが？」
想像できんぞ。
「ええ。だから、言ったのよね。『受験なんかやめたら？』って。だって、ミクはエスカレーター式の学校に通っていたわけだし、無理して受験なんかしなくても良かったんだもの」
「それで？」
「そうしたらミク、絶対にリンちゃんと同じ学校に行きたいから、って。ミクったら文字どおり、歯を食いしばって勉強を続けて。こちらとしては落ちてもいいと思っていたんだけどね、合格したのよ。ミク、ものすごくはしゃいでたわ」
なんで……ミクの奴はそこまで必死になったんだ？　そんなに、あの子と同じ学校に行きたかったのか？
くそっ……面白くない。
「ミクに負けてらんない……俺も頑張る」
「そうそう、その意気。頑張ってね、クオ君」

クオの決意（後書き）

クオがどうして今の高校を受ける気になったのか、という話です。

ミクの思い出（前書き）

オープニングはミクが高一の時で、そこから子供のころを回想するストーリーとなっています。

ミクの思い出

日曜日。わたしは、ふと思い立って、部屋の片づけをすることにした。わたしの家では定期的にお手伝いさんが掃除をしてくれるのだけれど、机とか本棚とか、私物を置いてある場所はハタキをかけるだけにしてもらっている。勝手に整理されると、どこに何を置いたのかがわからなくなってしまうからね。

古い漫画や小説――わたしは物持ちがいいので、小学校の頃にハマった漫画が今も部屋にあったりする――を整理していたつもりだったのだが、ついつい読みふけってしまい、気がつくと、正午になろうとしていた。……いけない。これじゃあ、何をやっていたんだか。

そんな時、部屋のドアをノックする音がした。

「誰？」

「俺だよ」

クオだった。何の用かしら？

「入ってきていいわよ」

わたしがそう言うと、クオは部屋に入ってきた。

「なあ、暇だったら一緒にゲームでも……何やってんだ、お前」

「本棚の整理」

「座り込んで漫画読んでるようにしか見えないんだけど」

「ん～、整理するつもりだったんだけど、読み出すと面白くて……」

クオは、床に積み上げてあった漫画の一冊を手にとって、開いた。

「……ベタベタな少女漫画だな」

わたしは、クオの手から漫画をひったくった。

「いいでしょ。こういうのが好きなんだから」

全く……少女漫画の面白さをわかれとは言わないけれど、ああいうこと言うのだけはやめてくれないものかしら。

「お、これ何だ？」

クオはわたしの言ったことなど全く気にせずに、今度はこれまた床に積んであった古いアルバムを手に取った。
「うわ……ミクちっちゃっ！　いつのアルバムだ、これ」
わたしは立ち上がって、クオが持っているアルバムを覗き込んだ。……小学校低学年の時のだ。
「わたしが小学生の時のよ」
「へーえ」
クオは勝手にアルバムを見ている。……別に恥ずかしいものが映ってるわけじゃないけど、なんだか落ち着かないわ。
「なあ、これ、何やってるとこだ？」
クオはアルバムのページを、わたしの前に差し出した。そのページに貼られている写真には、ドレスを着たわたしが映っている。
「ああ、小学校の時の学芸会の奴だわ」
「学芸会？　何をやったんだ」
「『シンデレラ』」
クオにそう答えながら、わたしの意識は、小学校の時へと戻っていった。

あれは、わたしが小学校の二年生の時だった。学芸会で、わたしたちのクラスは劇をすることになった。演目は『シンデレラ』
あの頃（今もだけど）大好きだったおとぎ話。わたしは当然、主役のシンデレラをやりたかった。そして、発表された配役。わたしは、シンデレラだった。
わたしは大喜びで家に帰り、お父さんとお母さんにそのことを報告した。お父さんもお母さんももちろん喜んでくれて、学芸会の時は絶対に見に行くからね、と言ってくれた。衣装は各家庭で用意してください、と書かれたプリントを見せると、お母さんは「ミクのために最高に可愛い衣装を用意してあげなくちゃね」とも、言ってくれた。

その次の日、お母さんが用意してくれるであろう、最高に可愛い衣装を着て、舞台でシンデレラになる自分を想像しながら、わたしは登校した。そして自分の教室に入ろうとした時だった。中から、クラスの子たちが話す声が聞こえてきた。

「ぜーったいにおかしいよね。初音さんがシンデレラ役って」

「うん、おかしいおかしい」

「初音さんのお父さん、おっきな会社の社長さんなんだよ。学校にね、いっぱいお金とかきふしてるんだって」

「それで先生、初音さんをヒイキしたのかな？」

「ねー、あれって、ヒイキだよねー」

わたしは石になったみたいに、その場に立ち尽くしていた。教室からは相変わらず、クラスの子たちの声が聞こえてくる。

「ずるいよね、そういうのって」

「そもそも、初音さんってそんなにかわいい？」

「シンデレラって感じじゃないよねー」

けらけらと笑う声。わたしは胸の奥に石を詰め込まれたみたいな気持ちで、くるりと背を向け、その場を離れた。

後になってから知ったのだけれど、その時、笑っていた中心の子は、もともとわたしのことが嫌いだったらしい。そこへ、わたしが劇の主役に決まったということで、日ごろから溜まっていた鬱憤が爆発したのだろう。でも、当時のわたしには、そんなことは全くわからなかった。ただ、普段は仲良くしてくれていたクラスメイトが、わたしのことをそんな風に言っていた、というのがひたすらショックだったのだ。

廊下を歩き、下駄箱が並ぶ辺りまで来たところだった。わたしは、呼び止められた。

「ミ～ク～ちゃ～ん～！」

振り向くと、リンちゃんがいた。リンちゃんとわたしは、幼稚園の頃からの幼馴染。

「どこ行くの？　そろそろ、朝の会はじまっちゃうよ？」

「……リンちゃんこそ」
「ミクちゃんが教室に入らなかったから、おいかけてきちゃった」
この時、リンちゃんとわたしは違うクラスで、わたしの教室の方が奥にあった。リンちゃんは自分の教室から、わたしが教室に入らずに、出口へと戻ったのを見たのだろう。
「……ミクちゃん、どこかぐあいわるいの？」
心配そうにわたしを覗き込むリンちゃんの顔を見ているうちに、わたしは胸がいっぱいになって、リンちゃんの前で泣き出してしまった。
「ミクちゃん？」
リンちゃんは泣いているわたしの傍にくっついて、わたしの背中を撫でてくれていた。わたしが泣いている間に、始業のベルが鳴ってしまったけれど、リンちゃんはそこを動かなかった。
「ミクちゃん、だいじょうぶ？」
「うん……」
長い間泣き続けると、涙というのも枯れるものなのか。暗い気持ちはそのままだったけれど、わたしの涙は止まってしまった。
「ねえ、どうしたの？」
わたしはリンちゃんに、教室でクラスの子たちが話していたことを説明した。
「きふなんかで、先生ヒイキするかな？　わたしのパパも学校にきふとかしてるけど、わたし、その他おおぜいよ？」
そう言ってリンちゃんは首を傾げた。
「リンちゃんのクラス、何やるの？」
「『舌切りスズメ』」
「リンちゃんの役は？」
「スズメのおやどでお料理をはこぶスズメその一」
「そうなんだ……」
わたしがそう言うと、リンちゃんはくすっと笑った。
「セリフね、一かしょだけ。『ようこそいらっしゃいました。さあ

どうぞおめしあがりください』って、みんなで声をそろえて言うの。ミクちゃんは、たくさんセリフおぼえなくちゃいけないから、たいへんそう」
言われてみればそうだった。主役というのは大変なのだ。
「でもミクちゃんならだいじょうぶ。きっとね、絵本からでてきたみたいになれるよ」
リンちゃんの言葉に、わたしはまだ落ち込んではいたけれど、ちょっとだけ元気になれた。
「……リンちゃん、ありがとう」
わたしはリンちゃんに抱きついた。リンちゃんがいてくれて、本当によかった。
ちょうどその時、一時間目の開始を告げるチャイムが鳴った。
「あ……授業はじまっちゃう」
元気はでてきたけれど、教室に戻る気にはなれなかった。
「ミクちゃん、どうする？」
「行こっ、リンちゃん！」
わたしはリンちゃんの手をつかんで、学校の外へと飛び出した。

かくしてわたしはリンちゃんと、半日学校をサボってしまった。半日、というのは、わたしとリンちゃんが登校してこなかった為、自宅に連絡が行き、「学校に行ったはずです」ということで、大騒ぎになってしまったからだ。わたしもリンちゃんも家が家なので――当時のわたしたちにはさほど自覚はなかったけど――、学校側は営利誘拐の可能性まで考えたらしい。
学校の近くの公園で遊んでいたわたしたちは、探し回っていた先生がたに発見され、学校に連れ戻されて、こってりと説教をされた後、迎えに来た両親に引き渡された。
家に帰ると、お父さんとお母さんは、わたしに学校をサボった理由を聞いた。なので、わたしは包み隠さずに、あったことを全部喋

った。
　わたしが話し終わると、お父さんとお母さんはしばらく小声で相談していたけれど、やがて、お父さんはこう言った。
「ミク、学校をサボるのは悪いことだ。それは、わかっているな？」
　わたしは頷いた。
「それはそれとして――ミクが悔しかったのはわかる。お父さんは、確かに学校にお金を寄付をしているが、それはミクをヒイキしてもらう為じゃない。寄付することで、学校は古くなったところを直したり、新しい何かを買うことができる。そうすると学校の状態がよくなるから、結果としてミクの為になる。だから、お父さんは学校に寄付するんだ」
　お父さんの話は、まだ当時のわたしにはちょっと難しかったけれど、お父さんがわたしのことを想って言ってくれているのだけは、なんとなくわかった。
「じゃあ、わたしがシンデレラ役になったのは、ヒイキじゃないの？」
「少なくとも、お父さんとお母さんは、学校にお前をヒイキしろと言ったことはないぞ」
　実際のところ、それがヒイキだったのかどうかははっきりしない、というのが実状だ。お父さんとお母さんがヒイキなんかしないでください、と言ったところで、担任の先生がどう判断するかまでは決められないからだ。でも、当時のわたしは、お父さんが力を込めてそう断言してくれたので、ヒイキなんかなかったんだと思い、心が軽くなった。
「それで、ミク、シンデレラはどうするの？　今なら、まだ、誰かに役を変わってもらうこともできると思うけど……でも、お母さんとしては、ミクのシンデレラを舞台で見たいわ。お父さんも、そうよね？」
「お父さんも、ミクが舞台にあがってシンデレラをやるところが見たいな」

お父さんとお母さんはそう言ってくれた。そして、わたしはどうしようか考えた。
クラスの子たちに言われたことは、やっぱりショックだった。でも、お父さんやお母さんは、わたしが舞台にあがることを楽しみにしてくれる。リンちゃんだって、きっとそうだろう。
わたしにとって、大切なのは、一体どっち？
「お父さん、お母さん、わたし、がんばってシンデレラをやるからね」

「……なあ、こっちに映ってるのって、お前の友達のあの子？」
思い出に耽っていたわたしは、クオの言葉で現実に引き戻された。クオが指差しているのは、学芸会の後で、リンちゃんと二人で撮ってもらった写真だ。わたしはシンデレラのドレス、リンちゃんはスズメを模したフードつきケープを着ている。
「そうよ」
「シンデレラに鳥なんか出てきたっけ？」
「この時はクラスが違ったのよ。リンちゃんのクラスは『舌切りスズメ』だったの」
わたしは、学芸会でシンデレラになった。クラスメイトの反応がちょっと怖かったけれど、結局、拍子抜けするぐらい何もなかった。今思うと、彼女たちは、わたしのいないところで、ああやって陰口を叩くのが精一杯の不満の表し方だったのだろう。腹の中では面白くなかったかもしれないけど、そんなのわたしにはもう関係ないことだし。
「ずいぶんと差がある演目だなあ」
「クラスごとに方針が違ったんじゃないかしら」
「お前の衣装、やけにゴージャスだな」
「お母さんが張り切ってくれたのよ」
出だしはショックだったけれど、今となってはいい思い出だ。劇

が終わった後で、お父さんとお母さんは、「よくやった」とわたしを褒めてくれた。お父さんは劇の間ずっとビデオを撮っていたし、終わった後は写真を何枚も撮ってもらって、それから、リンちゃんとリンちゃんのお母さんと一緒に、ケーキショップでケーキを食べたんだっけ。

「しかしお前たちって、この頃からこんなにべったりだったわけ」

クオ……どうして、そういう言い方するの？

「普通に仲良しって言えないの？」

「いいだろ、別に」

クオはアルバムを閉じると、部屋を出て行ってしまった。クオって、時々、よくわからないのよね。何でだろう？

ミクの思い出（後書き）

本棚の整理するつもりが、ついつい漫画や小説を読みふけってしまい、気がついたら時間が過ぎてたってこと、ありません？　私はしょっちゅうです。

母の苦悩（前書き）

リンの継母である、カエ（オリジナルキャラ）の視点で、第十一話【冷たくもなく、熱くもない】のサイドエピソードとなっています。

したがって、『ロミオとシンデレラ』を第十一話まで読み進めてから、読むことを推奨します。

母の苦悩

月曜の朝。リンは食欲が無いらしく、朝食をほとんど食べなかった。前の日もまともに食べていないのに、こんなことでは身体が持たない。

「リン、ちゃんと食べないと駄目よ。昨日もろくに食べてないでしょう？」

「……」

リンは沈んだ表情で、目の前の皿を見た。昨日も元気が無かった。……いや、違う。元気が無いのはいつもだ。今日は、それがとりわけひどいだけで。

「……もう行かないと遅れるから」

朝食を半分以上残したままで、リンは席を立ち、学校へと出かけて行った。最近、リンの考えていることがよくわからない。

「ルカ、どう思う？」

私は、朝のコーヒーを飲んでいる長女に、そう訊いてみた。

「何が？」

淡々とルカは尋ね返した。

「リンは、どこか具合が悪いんじゃないかしら」

「それなら、医者に連れて行けばいいわ。……ご馳走様」

ルカは空になったカップを置くと、出勤の準備をする為に、自分の部屋へと戻って行った。私はため息をついた。リンの考えていることがよくわからないのは最近からだが、ルカの考えていることがわからないのはもっと前からだ。どうしてなのだろう。

そもそも、私は、一体どこで間違えてしまったのだろうか。

十五年前、私は親族の勧めで、夫と結婚した。巡音グループという、大きな会社のトップに君臨する人。でも結婚に二度失敗してい

て、三人の幼い娘がいる。
「ほら、ああいう人だから、どうしても派手な女性が寄ってきちゃうでしょ。そういうのに目を眩まされて、二度も変なのつかんじゃったから、今度は堅実な人を探しているんですって。カエちゃんならぴったりだと思うのよ。辛抱強いし、家庭的でしょ」
一方私はというと、三年ほど前に身体を壊して勤め先を辞め、実家で行き場の無い生活を送っていた。一生こうしているわけにも行かない。親族の勧めるままに夫と見合いをすると、あっさりと話はまとまってしまった。
思うに、夫は結婚しておきたかったのだろう。金銭的には困っていないから、ベビーシッターでもお手伝いさんでも、簡単に雇って子供の面倒を見てもらうことは可能だ。だが夫は頭の固い人で、「子供には母親が必要」と考えていた。母親役をこなしてくれそうな人なら、きっと誰でも良かったのだ。そして、私は私で、経済的な安定と、社会的な立場を求めていた。要するに、お互いの利害が一致してしまったのだ。
結婚が決まり、夫になる家の人を訪問して、そこで私は初めて、自分の子供になる三人の娘たちに出会ったのだった。
「長女のルカ、九歳だ。こっちは次女のハク、六歳。それから三女のリン、二歳になったばかりだ。ルカ、ハク、リン。お前たちの新しいお母さんになる人だぞ」
「初めまして。ルカです。これからよろしくお願いします」
ルカと呼ばれた長女は、そう言って私に頭を下げた。その、あまりにも大人びた挨拶に、私は驚いてしまった。
「よ……よろしくね、ルカちゃん」
ルカは、物怖じせずに真っ直ぐに私をみつめた。その視線からは好意も敵意も感じられず、それが私を当惑させた。
「パパ、あたらしいママなんていらないよう。ママはどこにいったの？　ママにあいたい」
そう言い出したのは、姉の隣に立っていた次女のハクだった。目

には既に涙が浮かんでいる。
「ハク、わがまま言うんじゃない」
「やだやだやだ！　あたらしいママなんていらないの！」
ハクは、すごい勢いで泣きわめきだした。
「いい加減にしないかっ！」
夫がハクを怒鳴りつける。私は呆然として、それを眺めていることしかできなかった。叱られたハクは、泣きながら走って行ってしまう。
「ハクちゃん！」
私は後を追おうとしたけれど、夫に止められてしまった。甘やかすなと言いたかったようだ。
立ち尽くしている私のスカートを、引っ張ったのは末っ子のリンだった。
「……だっこ」
「リンちゃん、初めまして」
私はリンを抱き上げると、頭を撫でた。
「ハクには後でよく言っておく。とにかく、子供たちのことを頼んだぞ」
それが、三人の娘たちと初めて会った時に、起きた出来事だった。

夫と結婚した私は、一度に三人の娘の母親になってしまった。そのことは自分では納得しているつもりだったし、自分なりに覚悟を決めて飛び込んだはずだった。だが、ことは私が思っていたよりも遥かに厄介だったのだ。
三人いた娘たちの中で、私に懐いたのはリンだけだった。長女のルカはひどく他人行儀だったし、次女のハクはふくれっ面で、私に対する敵意を隠そうともしなかった。
私は自分なりに、娘たちと仲良くなろうと試みてはみた。台所で得意だったクッキーやケーキを焼いて振る舞ったり、買い物に連れ

出したり。だが、どれも上手くいかなかった。
ルカは、表面上はいい子だ。言われなくても勉強し、言われたことはちゃんとやり、禁じられたことは決してやらない。そういう子だった。お行儀も申し分なかったし、私は周囲から「できたお子さんでうらやましい」と、ずいぶん言われたものだった。だが、私には気になってならないことがあった。それは、ルカが全く遊ぼうとしないことだった。まだ遊ぶのが楽しい年頃だろうに、玩具の一つもほしがらないし、外に遊びに行こうともしない。不自然ではないだろうか？　相談してみても、夫は「いい子にしているんだから、それでいい」と、取り合ってくれなかった。夫だけではない。学校の先生などに話をしてみても「ルカちゃんは何の問題もない、いいお子さんです。お母さんは心配のしすぎですよ」と言われるだけだった。
一方で、ハクとリンは手がかかった。ハクは、全く私に懐こうとせず、何かというと泣いて暴れた。そしてリンの方はまだ幼児だったから、どうしても世話を焼いてやる必要があった。それに……全く懐かない上の二人に対し、私のことを慕って追いかけてくるリンは、いつしか特別な存在になってしまっていた。それが、良くないことであることを理解してはいたのだが……人の感情だけは、どうにもならない。
下の二人に時間をとられ、私はいつしかルカを一人にしておくことが多くなってしまった。そうして時間が経過し、気がつくと、私はルカのことが、全くわからなくなってしまっていた。
……だから、だろうか。ルカを一人にしておかなければ、良かったのだろうか。「あの子はいい子だから」ということに甘えないで、もっと早い時期に、ちゃんと向き合って話をしていれば、もしかしたら……。

私が物思いに耽っていると、電話が鳴った。お手伝いさんの一人

が応対している声が聞こえてくる。やがて、お手伝いさんが、電話の子機を片手に部屋に入ってきた。
「奥様、お電話です。リンお嬢様の学校の校医の先生からです」
嫌な予感に襲われ、私は電話を手に取った。
「代わりました。リンの母です」
「校医の吉井です。今朝、巡音リンさんが校門のところで貧血を起こして倒れまして」
私は、頭の中が真っ白になった。やっぱり、あんな状態で送り出すべきじゃなかったのだ。
「今保健室で休んでいますが、どうされますか」
「すぐに迎えに行きます」
「わかりました」
私は電話を切ると、お手伝いさんに起きたことを話し、リンを迎えに行くので車を出すように運転手に伝えるように言った。すぐ準備は整ったので、私はバッグに必要そうなものを詰め込み、車に乗り込んで、リンの学校へと向かった。
「リン！」
リンは保健室のベッドの上に、不自然なほど青ざめて横になっていた。私は娘の傍に駆け寄ろうとして、校医の先生に気づいた。
「巡音さんのお母さんですね」
校医の先生は、リンの状態について話をしてくれた。私は黙って先生に何度も頭を下げ、それから、リンの傍に行った。
「リン、立てそう？」
リンはうなずいて、身体を起こした。だが、まだ見るからに辛そうだ。
「ふらつくけど……多分大丈夫」
私はリンを支えて、車まで連れて行った。後部座席に乗せ、自分もその隣に乗る。そして運転手に、自宅に向かうように告げた。
帰宅の車の途中で、不意に、リンはこう言い出した。
「……怒らないの？」

「何を？」
「朝ごはん食べなかったことと、それが原因で倒れて、手間をかけさせたこと」
リンは申し訳なさそうにそう言った。
「起きてしまったことは仕方がないから……リン、家に着いたらおかゆを作ってあげるから、それを食べて、今日は横になってなさい」
リンは頷いて、目を閉じた。その様子があまりにも弱々しくて、私は悲しくなった。初めて会った時、リンはまだ二つで、よく笑う明るい女の子だった。それなのに……。ここ数年、リンの笑顔を見た記憶はない。そして、年々、生気を失っていく。
どうしたらいいのか、それすらも私にはわからない。
この子に幸せになってほしいと願うのは、私のわがままだろうか。私は、本来、三人の娘を公平に愛してやらなくてはならない立場だ。だが、私も一人の人間だ。懐かなかった上の二人より、どうしてもリンを可愛いと思ってしまう。
……もしこの世に神様がいるとしたら、どうかこの子に、幸せな人生を。私には天罰が下っても、構いませんから。

母の苦悩（後書き）

リンの継母であるカエさんのエピソードです。
書いた奴が言うのもなんですが、よくこれで十五年も結婚生活が持ったなあ……。相当根性無いと逃げ出しますよ、こんな家。

ある日のアクシデント（前書き）

リンの長姉、ルカの視点で、彼女が十五歳の時の話です。
この話に関しては、『ロミオとシンデレラ』を第十四話【鏡よ、答えて】までと、外伝【わたしはいい子】を読んでから、読むことを推奨します。
なお、ルカさんの性格は、【わたしはいい子】の時から、更にひどくなっています。

ある日のアクシデント

ああ、それにしてもうるさいわ。少しは静かにできないのかしら？　幾らわたしでも、こんなに騒がしかったら勉強できないわ。

わたしは参考書を閉じると、部屋の外に出た。騒音が大きくなる。聞こえてくるのは、廊下を挟んだ斜め向かいの部屋から。下の妹、リンの部屋だ。いつもは泣くのは上の妹、ハクの役目なんだけれど、今日はリンが泣き喚いている。……本当にうるさい。

リンの部屋のドアが開いて、お手伝いさんが出てきた。両手に紐でくくった本の束を抱えている。

「旦那様、これで全部だと思います」

「全部、廃品回収業者に持って行ってもらえ」

ああそうか。そう言えばお父さん、リンは来年から三年生だから、絵本は卒業させるって言ってたわね。確かにいつまでもあんなもの読ませておくものではないわ。わたしは五歳になる頃には、絵本なんか興味無くなっていたけれど。もっと難しい本を幾らだって読むことができたし。そうなってまで絵本なんて読むものではないしね。あれは小さな子供が読むものなんだから。

「やだやだ！　すてないで！」

リン、諦めなさい。泣いたって無駄だけどね。ハクを見てればわかるはずなのに。

「あなた……リンはまだ八歳よ。絵本を無理に卒業させなくても……」

カエさんだ。相変わらず、リンのことを甘やかしている。リンはそもそも、今まで甘やかされすぎだったんだわ。わたしやハクは四歳の頃から家庭教師について勉強――さすがにこの頃は、平仮名の読み書きと数字の数え方ぐらいからだけど――を教わったけれど、リンだけは家庭教師じゃなくて、カエさんが教えていたし。だからいつまでも絵本を読むような子になったんじゃないかしら。

「甘やかすのはリンのためにならん」
「リンだって絵本以外の本も読んでいるし、少しずつこういうものは卒業していくだろうから……」
「それでは遅い」
そのとおりね。遅すぎたぐらいだわ。
「ん、ルカ、どうした？」
お父さんが、廊下に出てきたわたしに気がついた。
「リンがうるさくて……これじゃ勉強できないわ」
「片付けが終わったら黙らせるから、少し待ってろ」
リンはピンクのうさぎのぬいぐるみを抱いて、泣きながらカエさんのスカートにまとわりついている。カエさんは、そんなリンの頭を撫でていた。……全く。
「ああ、これも捨てないとな」
お父さんは、リンの手からぬいぐるみを取り上げた。途端に、リンが今まで以上の声で喚きだす。聞き分けの無い子ね。
「うさちゃんを返してっ！　返してえっ！」
リンはお父さんに飛びついてぬいぐるみを取り返そうとしているけれど、八歳児が成人男性に叶うはずもない。お父さんはお手伝いさんに、ゴミ袋を持ってこいと叫んでいる。
「ぬいぐるみぐらいでガタガタ言うなっ！」
「ぬいぐるみじゃないわ！　うさちゃんよっ！　わたしの大事なお友だちなの！」
ぬいぐるみがお友達って……リン、あなた、成長が遅れてるんじゃないの？　たかが綿の詰まった玩具じゃないの。生き物ですらないのに、何を言っているんだか。
「それはリンの一番のお気に入りで、毎晩抱いて寝ているのよ。今取り上げなくても……」
カエさん、黙ってて。
「そんなことをさせているから、リンはいつまでも幼稚なんだ。ああ、他にもぬいぐるみあったな。おい、全部持ってこい。まとめて

捨ててしまえ」
　お父さんはカエさんを無視して、お手伝いさんに指示を出している。お手伝いさんが、リンの方をちらっと気の毒そうな表情で見た。リンは座り込んでわんわん泣きじゃくっている。だから、泣いても無駄なのに。
　……そう言えばあのぬいぐるみ、カエさんが家に来たばっかりの頃に、三つセットでどこからか買って来たんだわね。リンが貰ったピンクの他に、白いのとと水色のとがあったはず。わたしたちに一つずつくれたのだけど、ハクは貰った次の日にはぬいぐるみを切り刻んでゴミ箱に捨ててしまった。わたしもいらないものだから、確か一年ぐらいで、どこかの誰かにあげてしまった。わたしがもらったの、白と水色、どっちだったかしら。……どっちでもいいか。大したことではないし。
　それにしても、リンはいつになったら泣きやんでくれるのだろう。うるさくて勉強に集中できない。
「お父さん、わたし、勉強したいから図書館に行ってくる」
　そう言うと、お父さんは珍しく、困った表情になった。
「ルカ、今日は運転手さんが休みを取ってるから、車が出せないぞ」
「……いい。歩いて行くから」
　図書館まではちょっと遠いけれど、歩けない距離ではない。今、この家にいても勉強どころじゃなさそうだし。ハクもよく泣く子だったけれど、最近は喚いても無駄だと理解したらしく、ぐずぐず泣くだけになってきている。これからは、ハクの代わりにリンが泣き喚くようになるのだろうか。……困った妹たちだ。
「そうか。気をつけて行くんだぞ」
「ええ、行ってくるわ」

　わたしは鞄に勉強道具を詰め込んで、家を出た。朝晩に軽いジョギングをしているから、歩くのは別に苦痛ではない。運動は好きで

はないけれど、多少の体力は必要だ。体育だけ極端に成績が悪い……なんてよろしくないし。
歩く途中で、大きな交差点に出た。信号は赤。早く青にならないかしら。変わるのを待ちながら、そんなことを考える。その時だった。
「あれ……もしかして、巡音さん？　巡音ルカさんじゃない？」
声をかけられて、わたしは振り向いた。わたしの後ろに、同い年ぐらいの女の子が立っている。黒髪に色鮮やかなメッシュを入れた、派手な顔立ちの子だ。……誰だったかしら？　わたしの名を呼んだということは知り合いなのだろうけれど。
わたしが無言で立っていると、向こうはわたしに近づいてきて、しげしげと顔を覗きこんだ。
「やっぱり、巡音さんだ。あたしよあたし、憶えてない？　小学校の時一緒だった欲音ルコよ。ルコとルカ、音が一つ違うだけだね～って、あたし言ったじゃない」
そんなこと、言われたかしら？
「いやだ、もしかして忘れてるの？」
憶えていないのは事実なので、わたしは頷いた。
「ねえ、それってひどくない？　あたしみたいな目立つ子を忘れるなんて」
欲音さんとやらは、そう言って唇を尖らせた。そういうことは、自分で申告することではないと思う。
「実際に憶えていないんだから仕方ないわ」
わたしが淡々とそう言うと、欲音さんは目を細めてわたしを見た。
「巡音さんて、あの頃とあんまり変わってないね」
だから、何だというのだろうか。と、そこで信号が変わった。わたしは、欲音さんに背を向けて歩き出す。
「ちょっと巡音さん、まだ話終わってないんだけど」
歩き出したわたしを、欲音さんが追いかけてきた。わたしは交差点を渡りきったところで立ち止まり、振り返る。

「何？」
そう問いかけると、欲音さんは両手を上にあげた。
「ひっどーい。久しぶりに会った昔馴染みにその態度って無いんじゃないの？」
何なのだろう、この人は。わたしはちょっと呆れて、目の前の彼女を見た。
「わたしにはあなたを懐かしむ理由がないもの」
わたしの答えを聞いた欲音さんは、こめかみを指で押さえた。
「そういうことは、はっきり言うものじゃないと思うんだけどなあ」
「あなたが訊くから答えたのよ」
欲音さんは、背筋を伸ばし、両手を腰に当てた。
「さっきの言葉、訂正するわ。巡音さんは変わってないと思ってたけど、違ってた」
……そうですか。小学生の時の知人ということは、あの頃から三年は経過しているのだから、どこかしら変わって当たり前だと思うのだけれどね。
「あなた、はっきり言って、昔よりずーっと性質が悪くなっているわ！」
その言葉に、心が少しだけ波立った。わたしの性質が悪くなっている？　そんなことあるわけがない。誰に聞いたって、わたしの性質が悪いなんて答えは返ってこないはずだ。
「大体さあ、おかしいじゃない？　巡音さん、今、あたしを思い出す努力すらしなかったでしょ？　まともな人なら、昔の知人に会って記憶がなかったら、必死で思い出そうとするものよ」
そう言われても、小学生の時のクラスメイトなど、一々憶えていない。思い出す努力など、するだけ無駄だ。
「それに、今の何？　『あなたを懐かしむ理由がない』ですって？　あたしがあなたをいじめていたっていうんなら、そう言われても仕方ないわよ。でも、ごくごく普通のクラスメイトだったでしょ。なのに何、その言い草は？」

記憶に無いのだから、当然、関係も憶えていない。ただ誰かをいじめたとか、いじめられたとか、そういう記憶はないから、その関係性にあてはまらないことだけは確かだ。
「……ちょっと巡音さん、あなたなんで無反応なの？」
立ち止まってあれこれ考えていると、欲音さんが詰め寄ってきた。
「何？」
「何じゃないわよ何じゃ！　全く、あなたって、どうしてそうなの！？　人の話、ちゃんと聞いていたの？」
「ええ。『なんで無反応なの？』って、そう訊いたわよね。その前は、わたしたちがごくごく普通のクラスメイトだったという話で」
そう言うと、欲音さんは目を見開いた。……何だろう。
「……全くもう。巡音さんって、どうしてそうなの？」
自分一人が納得している話を延々続けないでもらえないだろうか。
「なんかもう、あなたと話をしていても埒が明かないって感じがしてきたわ」
欲音さんは、一人で勝手に結論を出している。とはいえ、話をしていても仕方がないというところは、わたしも同意する。こんな話は時間の無駄だ。
「でもね、一つだけ言っとくわ。巡音さん、あなた、生きていて楽しいの？」
楽しい……？
「あたしね、不思議だったのよ、あなたのこと。だってあなた、いつも淡々と一人で勉強してるだけだったでしょ。クラスのみんながアイドルやアニメや漫画の話で盛り上がっている時はいつも、一人でしらーっとしていたし。みんな、あなたのことを『教科書女』って呼んでたわ。教科書みたいに真面目で、面白みってものが全然無いから」
……だからどうだというのだろうか。わたしはやるべきことをやっているだけで、それをどうこう言われる筋合いもない。
「あなた、一体、何が楽しみなの？　あたしにはわからないわ。会

わなかった三年の間に、拍車のかかった教科書女の巡音さん」
そこまで言って、ようやく、欲音さんは黙ってくれた。どうやら、これで終わりらしい。
「それで終わり？」
「……そうよ」
「そう。それじゃ」
わたしは、欲音さんに背を向けて歩き出した。こんな話を律儀に聞くこともなかったかな、と思いながら。
「ああもう……巡音さんっ！　あのねえっ！　あなた、時々歩くマネキンに見えるわよっ！　そんなんでいいわけっ！？」
後ろで欲音さんが叫んでいる。が、わたしは無視して、先へと歩いて行った。それにしても、歩くマネキンとは一体何のことなのだろうか。

図書館に着いたわたしは、座席に座ってひとしきり勉強した。集中しきっていたため、時間の経過に気づかず、気がつくと閉館の時間になっていた。いけない、もう外は暗くなりかけている。荷物をまとめ、わたしは帰路についた。
帰り道では、行きのような妙な人に遭遇することはなく、家まで真っ直ぐにたどり着いた。玄関のドアを開けて、家の中に入る。……泣き声は聞こえてこない。さすがに、リンも静かになったのだろう。
玄関ホールには、ハクがいた。わたしを見て、びくっとした表情になる。
「ただいま、ハク」
挨拶は礼儀の基本だ。
「お帰りなさい……お姉ちゃん……」
ハクはここのところ、元気がない。中学受験に失敗したのが原因だろう。わたしはそれ以上ハクに構わず、居間へと向かった。カエ

さんは、ここかキッチンにいることが多い。別に用があるわけではないけれど、帰った以上はただいまを言わなければならない。
カエさんは、居間にはいなかった。キッチンも覗いてみたが、そちらにもいない。お手伝いさんが二人、立ち話をしているだけだ。
「旦那様、少し厳しすぎるんじゃないかしら」
「しっ、滅多なことを言うもんじゃない。旦那様に聞かれたら、下手すりゃクビだよ」
「大丈夫よ。旦那様は急用が入ったとかで出かけて行ったから。運転手が休みだからハイヤーを呼ばなくちゃならないとか、ぼやいてらしたわ」
「ふーん、ならいいけどね……ああ、確かにあたしも厳しいと思うよ。リンお嬢様はまだ八歳だ。ぬいぐるみや絵本が大好きでも、別に気にすることなんてないだろうに。あたしの娘だって今十歳だけど、まだ毎晩ぬいぐるみを抱いて寝てるよ」
「わたしだって、実家に一番のお気に入りは残してあるわ」
お手伝いさんたちはたわいないやりとりを続けている。……まあいいか。お父さんは家にいないのね。カエさんはどうしたんだろう。
「奥様、ずっとロフトの前に立っていらっしゃるのね」
「そりゃ心配だろうよ。旦那様ときたら、自分がいいと言うまでリンお嬢様を出すなとか言ってらっしゃったけど、いくらなんでもやりすぎだ。あのロフト、そろそろ真っ暗になるだろうしね」
ああ、リンはロフトに放り込まれたのか。よほどひどくお父さんを怒らせたのね。ハクも実の母親が出て行った直後、泣き止まなくて何度か放り込まれていた。わたしは一度も放り込まれたことがないけれど。で、カエさんはリンが心配でドアの前に立ってるわけか。
……ずるい。
心のどこかで、何かがそう呟いた。今のは何？
きっと、あってはいけないものよね。わたしが思うはずのないことだわ。
わたしは背を向けると、キッチンを後にして、玄関ホールへと戻

った。ハクがまだ、所在なさげにうろうろしている。……何をやっているんだろう。
「ねえ……お姉ちゃん……」
「何か用？」
わたしの方は、ハクに用事などない。
「あのね……」
ハクが何か言いかけた時だった。上の階から悲鳴が聞こえてきた。わたしもハクも、さすがに驚いて上の方を見る。
「今の……？」
「ね、ねえ、お姉ちゃん……今の、リンの声じゃなかった？」
言われてみればそうかもしれない。
「リン？　今度は何をしでかしたのかしら」
お父さんを怒らせるようなことじゃないといいのだけれど。ハクが、引きつった表情でこっちを見ている。
「ハク、何か？」
引きつった表情のまま、じりじりと後ずさるハク。自分から声をかけてきたのに、どうしたというのだろうか。
と、ものすごい足音で、誰かが階段を駆け下りてきた。……カエさんだ。真っ青になっている。カエさんは玄関ホールに置いてある電話に飛びつくと、電話が壊れそうな勢いで番号を押した。
「今すぐ救急車をよこして！　娘が怪我をしたんです！　血が……血がすごくて！　お願いだから早く！」
それでは伝わらないだろう。電話口から、落ち着いてとかいう相手側の声が聞こえている。カエさんは何度か深呼吸をした後、この家の住所や自分の名前について説明を始めている。
よく見ると、カエさんの服には血が着いていた。カエさんの言うとおりなら、リンの血だろう。
騒ぎを聞きつけたのか、キッチンからお手伝いさんたちがやってきた。電話を置いたカエさんは、お手伝いさんに事情を説明している。

「ロフトの前に立っていたら、中からリンの悲鳴が聞こえてきたの。開けるなって言われていたけれど、どう考えてもただごとじゃなかったから……開けてみたら、リンが傷だらけで倒れていて」
「奥様……一体何が」
「多分暗い中周りがよくわかってなくて……転んだ弾みに、古い姿見に突っ込んでしまったんだわ。……やっぱり、暗くなる前に出すべきだったのね。リンはロフトから連れ出して、今は自分の部屋よ。でも、鏡の破片が刺さってる傷があるから、病院に連れて行かないと。私じゃ処置できないわ」
そこまで話すと、カエさんは大きく息を吐いた。
「私は部屋に戻ってリンについているわ。救急車が来たら一緒に病院に行くから……ルカ、ハク、ちょっとこっちに来て」
呼ばれたので、私はカエさんの前に立った。ハクもやってくる。
「そういうことだから、リンを連れて病院に行くわ。どれだけ時間がかかるかわからないし、もしリンが入院でもするようなことになったら、多分泊り込みになるでしょう。だから二人とも、私が帰って来なくても時間になったら夕食を食べて、お風呂に入って寝てちょうだい。連絡も帰宅も待たなくていいから」
そういう話か。言われなくてもわかっている。
「大丈夫よ。きちんと言われたとおりにするから」
「……リン、大丈夫なの？」
ハクが訊いている。ハクが自分からカエさんに話しかけるのは珍しい。
「きっと大丈夫よ……お医者様がちゃんと治療してくれるわ」
その割には、さっきのカエさんはひどく取り乱していたようだけれど。話は終わりみたいなので、わたしは自分の部屋に戻ることにした。
「わたしは、部屋に戻ってるわ。荷物も片付けたいし」
カエさんとハクとお手伝いさんたちが、何か言いたそうな顔でこっちを見る。

「……何か？」
「いえ……なんでもないわ。……そうね、ルカは外から帰ってきたばかりだものね。部屋で休むといいわ」
カエさんは、わたしが疲れているのだと判断したようだ。わたしは皆に背を向けると、階段を上がっていった。

心の奥底で、何かがぷつぷつと音を立てているような気がする。
だから、消えてちょうだい。存在してはいけないものなのだから。
「気味の悪い子ね。何を考えているのかさっぱりわからない。それなのに、いつもわたしはいい子ですって顔をしちゃって」
ああどうして、わたしはこんなことをいつまでも憶えているのかしら。忘れたと思ったころに、記憶の底から飛び出してくる。もうあの人が、わたしの前から消えてずいぶんになるのに。

ある日のアクシデント（後書き）

なんか、新井素子の小説『ひとめあなたに……』の中の、「走る少女」のエピソードみたいになっちゃいましたね。新井素子は今も昔も大ファンで、大きな影響を受けた作家だから、仕方ないかなあ。

一人称の何が厄介って、「語り手の認識の外にあることは書けない」ってことなんですよね。書き手である私が幾ら認識していても、ルカさんが気づいてないことは書けないんです。

だからこの作品は、オブラートに包んだような感触になってしまっています。何せこの話の語り手であるルカさんは、自分で自分がわかっていないから。幼少期に受けた虐待で、性格が歪んだまま成長しているので、なんだかもう手の施しようがない気がする……。

あの子はカモメ（前書き）

レンの姉、メイコの視点です。
この話に関しては、『ロミオとシンデレラ』第十六話【道は歩くに連れてできるもの】まで読んでから、読むことを推奨します。（『アナザー：ロミオとシンデレラ』も第十三話【来て一緒に歩こう】まで読んだ方がいいかも）

あの子はカモメ

それにしても、妙な偶然というのはあるものだ。まさか、弟が連れてきた学校の友達が、私の高校時代の後輩の妹だったなんて。

弟は友達とＤＶＤを見るというので、私は自分の部屋へと退散した。といっても同じ家だし、何かトラブルがあればすぐに駆けつけることはできる。……もっとも、レンがそんなことをするとは思ってないけどね。そんな気があるのなら、事前に「女の子を家に呼ぶから、その日は家にいてくれ」なんて言わないだろう。この気配りはあくまで、念のため、だ。

しかし本当に「ただの友達」なのかな？　実際のところ、結構気になってるんじゃないの？

やれやれ、私は彼氏を作るどころじゃないというのに。とはいえ、今の状態じゃ恋愛なんてしてられないしね。せめて弟が高校を卒業するまでは、私がこの家を守らないと。

さっきのあの子――リンちゃんか。ハクちゃんの妹だそうだけれど、あまり似ていない。大人しそうなところだけは共通しているけど。後、気になるのは。ハクちゃんのことを訊いた時の、リンちゃんの態度だ。明らかに、「それは訊いてほしくないです」という雰囲気だった。……何かあったのかな？

病気？　怪我？　いや、それだったらむしろ言うわよね。昔の後輩がそんなことになっていたら、お見舞いの一つにも行きたくなるのが人情だもの。

じゃあ、一体、何なんだろう？　まさか殺人事件の被害者になったとか……ないない、映画の見すぎ。それだったら、その前にどこかから知らせが入ってくるって。

あれこれ考えるうちに、私は高校の時のことを、思い返していた。

高校三年になったばかりのある日の放課後。バドミントン部の部室へと向かった私は、その前でうろうろしている一人の女の子を見つけた。長い髪を後ろで一つに束ね、いかにも新品といった感じの制服を着ている。部室の前で立ち止まっては、中をうかがい、それから立ち去ろうとして、また戻る……そんな行動を繰り返している。ああ、これは……。

私は、その女の子に声をかけた。

「もしかして入部希望者？」

女の子は文字通り、その場に飛び上がった。そんなに驚かなくてもいいと思うんだけどね。

「え、ええと、その……」

「あ、まだ入るかどうか決めかねてるってこと？」

「そんな感じです……」

ふーん、なるほどね。私は部室のドアを開けた。

「じゃ、まずは見学してって。自己紹介するわね。私は三年の鏡音メイコ。この部のキャプテンよ」

女の子は慌てた様子で私に頭を下げた。

「新入生の巡音ハクです」

「バドミントンの経験は？」

「……ありません。あの……やっぱり、経験者じゃないと駄目ですか？」

それでためらってたのか。うちは強豪校じゃないから、入部者にそんなに高いハードルは設けていない。

「うちの部は経験は不問だから、気負わなくて大丈夫よ。ただ、慣れるまではちょっと大変かもしれないけど」

私はそう言って、彼女の背を軽く叩いた。

放課後の間部活を見学したハクちゃんは、悩みながら帰って行った。けれど、その次の日には、恥ずかしそうに入部届を持って来た。

もちろんこっちは大歓迎。
　バドミントンはレジャーとしても人気があるから、軽いスポーツだと思っている人も多い。でもどんなスポーツでもそうだけど、本格的にやるとなると途端にハードになる。バドミントンも例外ではない。だから「軽いスポーツをお遊び感覚でやりたい」と入ってきた子は、一ヶ月としないうちに、落差の大きさにびっくりして辞めていくことになる。ハクちゃんもその可能性が高いかなと私は思っていた。中学時代はずっと文化系の部だったと言っていたし、正直、スポーツが得意そうには見えなかった。
　でも、ハクちゃんは辞めなかった。上達は新入部員の中で一番遅かったけれど、頑張って練習についてきた。
「ハクちゃんは、なんでうちに入ろうと思ったの？　中学の頃は違ったんでしょ？」
　部活は、大体中学、高校と同じ部に入る子が多い。最も、高校になると部活の種類も増えるから、新しくできた選択肢を選ぶ子もいる。
「その……折角高校に入ったんだから、何か新しいことに挑戦してみたかったんです」
　ああ、それはそうよねえ、と私は思った。やっぱり、中学と高校じゃ感じが違う。私はバドミントンが好きだったから、中学、高校共にバドミントンを選んだけれど。
「いいことじゃない」
「あ……そう思いますか？」
「やっぱり人間、挑戦心は大事よね。じゃ、もう一踏ん張りしますか」
「え～、先輩まだやるんですか……」
　当然でしょ、と、私は答えて、ラケットを片手に立ち上がった。ハクちゃんも、ため息をつきながらもつきあってくれた。

「あ……そう言えば……」
私は、あることを思い出した。私の引退試合になってしまった、地区大会のことだ。準決勝までは進めたけれど、私の学校はそこで敗退した。
ハクちゃんは一年で、当然レギュラーではなかったけれど。一生懸命、試合に出る先輩部員たちを応援していた。
試合と試合の間の休憩の時間、その辺りをぶらぶら歩き回っていた私は、ハクちゃんがもめている現場に出くわしてしまった。
「なんで来たりしたのよ！」
「だって今日は試合でしょう？　だから応援に」
「来なくていいって言ったじゃない！　あたしはレギュラーじゃないから、試合には出られないんだし！」
ハクちゃんは、部活内ではおとなしい子で通っていた。少々愚痴っぽいところはあったけれど、基本は物静かで真面目な子、という印象を私を含む誰もが持っていた。だから、こんな強い調子で話していることに、私は驚いてしまった。誰と言い争っているんだろう。そう思った私は、何気ない風を装って、ハクちゃんに声をかけた。
「ハクちゃん、どうしたの？」
「あ……メイコ先輩……」
明らかに気まずそうな表情を見せるハクちゃん。言い争っていた相手の人――四十代の初めぐらい――は、ほっとしている様子。年齢から見て、お母さんだろう。うーむ、ハクちゃんってば、反抗期なのかしら。それとも照れくさいのかな？
「初めまして、鏡音メイコです。バドミントン部のキャプテンを務めています」
「初めまして、ハクの母です。娘がいつもお世話になっています」
ハクちゃんのお母さんは、こちらに丁寧に頭を下げた。ちょっと慌てて私ももう一度頭を下げる。
「ハクちゃんは頑張ってますよ。練習熱心だし」
私がそう言うと、ハクちゃんのお母さんは嬉しそうな表情になっ

た。ハクちゃんは仏頂面になる。やっぱり反抗期か、と、その時の私は思っていた。後で、そんな単純なものではないと知らされたのだけど。

「そうですか。ハク、頑張ってるのね」

「……」

ハクちゃんは答えず、そっぽを向いた。ハクちゃんのお母さんの影から小柄な女の子が姿を現して、そんなハクちゃんにまとわりついている。

「ハクお姉ちゃん……怒ってる？」

「別に怒ってないから」

「でも……」

妹さんかな？　私の視線に気づいたのか、ハクちゃんはその子の背を押して、私の方を向かせた。

「メイコ先輩、妹のリンです」

「初めまして、リンちゃん」

私はそう言ってリンちゃんに笑いかけたけど、リンちゃんは下を向いてもじもじしている。どうやら、人見知りするタイプらしい。

「リン、ほら、ご挨拶は？」

「……初めまして」

それだけ言うと、リンちゃんはまたお母さんの影に隠れてしまった。

……つまり、初めて会ったのはあの時だったわけ。五年も前だから、お互い憶えてなかったのも無理ないけど。リンちゃんはまだ小学生だったし。あれから背が伸びて、大分感じも変わったな……。そういや、レンも身長伸びたのよね。当時は小さかったのに、いつの間にか私を追い越してるし。

「妹さん、幾つ？」

「小六です」

「へ～。うちの弟と一緒だわ」

「先輩、弟さんいるんですか？」

「いるよ～。連れてくればリンちゃんと遊べたのにね」
とはいえ、間違ってもレンは姉の試合を見に来たりしないけどね。前に部活の子たちを家に連れて行った時に鉢合わせして「弟さんだ～、可愛い～」ともみくちゃにされたのが尾を引いているから。「姉貴の友達がいっぱいいるところには、絶対行かない！」と、あれ以来宣言されている。
「先輩、そろそろ試合の時間ですよね」
「あ、本当だ。戻らなくちゃ。では、失礼します。リンちゃん、じゃあね」
私はハクちゃんのお母さんにもう一度頭を下げると、ハクちゃんと一緒にみんなが集まっている場所へと戻った。

その数日後の部室で、私はハクちゃんとたまたま二人になった。
「そう言えばハクちゃんのお母さん、珍しいわね。普通、レギュラー陣でもなかなか応援に来ないのに」
スポーツに力を入れているエリート校なら親も気合いが入るだろうけど、うちのような平均レベルの高校では、レギュラーでも応援に来るのは少数派だ。レギュラーでない子の親なら、皆無といっていい。うちの母だって仕事が忙しいから、そもそも応援にも来れないし。仕方ないけどね。……去年から、母子家庭になってしまったんだもの。もともと共働きの家庭だったけど、それ以降、母は今まで以上に仕事に打ち込むようになった。「しっかり稼いで、あんたたちを大学までは出させるから」って言うのが、最近の口癖。
……って、暗いぞ、私。落ち込まないって決めたんだ。私が落ち込んでたら、レンはどうなるの？
ハクちゃんは暗い表情で、うつむいた。そしてぽつんとこう言った。
「……あの人は母親じゃありません」
「え？」

「父の再婚相手……つまり、継母なんです」
私は呆気に取られた。こんなことを言い出されるなんて思っても見なかったから。
「え、え……」
「すいませんこんな話して」
「じゃあ、あの、リンちゃんだっけ？　あの子とも血が繋がってなかったりするの？」
今思うと、何を訊いているんだって感じだ。そんなデリケートなことを、ほいほい訊くものじゃない。とはいえあの時の私は混乱していて、何か喋らなくちゃという気持ちが強かった。咄嗟に口から出てきたのが、これだったのだ。
「リンは血の繋がった妹です」
「そうなんだ……」
あのお母さんと、ハクちゃんのお父さんの子供なのかな。となると、色々難しいものがあるのかもしれない。
「あの……先輩、あたしの話、ちょっとだけ聞いてもらえますか？」
ハクちゃんがそう言い出したので、私は頷いた。
「いいけど……」
「あたし、姉がいるんです。三つ上の。成績優秀で素行も問題無しで、おまけに美人です。レイディ・パーフェクトって言葉を進呈したくなるような、そんな人なんです」
ハクちゃんには妹だけじゃなくて、お姉さんもいたのね。それにしても、レイディ・パーフェクトか……。
「姉は十二の時に榛崎中を受けて、あっさり合格しました。そして六年の間学年のトップを取り続けて、今年、これまた難関の大学にストレートで合格しました」
榛崎といえば、有名な進学校だ。そこで学年トップ……どれだけ頭がいいんだろう、そのお姉さん。ハクちゃんより三つ上だから、私とは一つ違いか……うーん、世の中にはそんなに頭のいい人がいるのね。でも、それだと妹としては、辛いだろうなあ。私、優秀す

ぎる姉じゃなくて、良かったかも。少なくとも、私がレンのプレッシャーになることだけはないだろう。
「ちなみに、榛崎はあたしの父が出た学校です。父は、あたしにも榛崎を受けさせたんですけど……」
「駄目だったのね」
受かっていたのなら、ここにハクちゃんはいないはずだ。ハクちゃんは頷いた。
「落ちました。それからの三年は針の筵にいるみたいでした。中学は仕方ない。でも高校は絶対受かれって言われ続けて。でも高校も駄目だったんです。別に榛崎に行きたかったってわけじゃないんですけど、いえむしろ、姉と同じ高校って嫌だったんですけど……だって絶対、比べられますから……」
確かに、比べられるというのは気持ちのいいもんじゃない。私がまだ小学生の時、クラスに一人滅茶苦茶優秀な子がいて、担任の先生が何かというとその子を引き合いに出していたことがあったんだけど、あれは今思い出してもいらっとくる。もっともこれは学校内だけでのことだから、帰宅すれば関係無いし、学年が変わるとクラスが変わってその子とは疎遠になった。でも、ハクちゃんの場合、相手は血の繋がったお姉さんだから逃げ場がない。……想像しただけで鬱々とした気分になってくる。
「リンは小六です。父はリンにも榛崎を受けさせる気でいます」
ハクちゃんはそう言って、震えだした。私はどう言葉をかけていいのかわからず、無言でその場に立っていた。
「リンは多分受かるでしょう。今の段階で、学校の先生も家庭教師も『合格ラインに達している』って言っているし……。あたし、最低な姉です。リンがどんなプレッシャーを感じているのかもわかっているし――あたしが落ちてから、父はリンの教育にやっきになりだしました――落ちたらどういう扱いを受けるのかもわかっているのに、リンが落ちればいいと思ってしまうんだから」
うわ……ちょっと、それは……。

「なんであたしだけ、デキが悪いんだろう……小さい頃からそうでした。あたしは勉強ができないってずっと言われ続けて」
えーっと……うちの高校も、一応そこそこのランクなんだけどな？　榛崎よりは下だけど。うちに受かったんだから、箸にも棒にもかからないってことはないと思うんだけど……。
「高校受験に失敗してからは、父はもう、あたしのことなんてどうでもいいみたいで。きっといらない子なんですよ、あたしなんか」
参ったわね……こういう時、どういう言葉をかけてあげたらいいのかなんて、さすがにわからない。私はこの手のプレッシャーとは無縁だからなあ。勉強しろとか家事をしろとか、お前は姉なんだから弟の面倒を見ろとかは言われてきたけど、一番上だしパーフェクトな兄姉もいないし。レンとは年が離れてるし性別も違うから、そんなに比較されることもない。そもそも、レンは別にパーフェクトな弟でもない。学校の成績もそこそこだし、イタズラ好きな一面もある。本人も親も中学受験に興味ないから、公立に行くことは既に決定済みだし。
「うーん……でもねえ……私が見たところ、ハクちゃんは根気はあるわよ。それは私が保証するわ。だってこうして続けてるでしょ？」
根気の無い子はすぐ辞める。今年も何人も辞めていった。
「先輩……そんな、無理に慰めてくれなくても……」
「無理な慰め口にできるほど、私器用じゃないから。ハクちゃんは確かに上達は遅いけど、それでも、前に比べたらサーブ入るようになってきてるし、ラリーも続くようになってきるわ」
上達に近道はない。体力をつけ、練習をこなし、試合に出て経験を積む。
「けど……それって本当に些細な進歩だし……」
「あのね、ハクちゃん。例え世間から見たら些細なことでも、コツコツやっていけば、その後には何かが残るの。私はこの高校で三年間バドミントンをやって、一番いい成績で都大会のベスト８だけど、自分なりに全力は尽くしたって思いがあるし、それだけは胸を張っ

て語れるわ」
私はハクちゃんの背を軽く叩いた。
「だからハクちゃんも、とりあえず、やれることをやってみて。ね？」

私は三年だったからこの後部活は引退したけれど、受験しなかったこともあり――早いうちに、高校を卒業したら専門学校に行くと決めていたのだ――度々部活に顔を出して、後輩の様子を見ていた。
ハクちゃんは相変わらず上達は遅かったけれど、それでも頑張っていたし、私も練習につきあったりしていた。少なくとも、やる気だけはあったのだ。
私の卒業式の日、ハクちゃんは涙ぐみながら「先輩がいなくなると淋しいです」って言って、他の後輩たちと一緒に花束を渡してくれた。それが、ハクちゃんに会った最後だ。
……何があったんだろう？　もしかして、失踪でもしたとか？
でも、リンちゃんは訊いてほしくなさそう。あんまりしつこく訊くとレンが怒るだろうし。
そういやあの当時は考えてもみなかったわね。レンが榛崎高に進学するなんて。中学に入った頃からぐんぐん成績が伸びて、これならいい高校に行けると先生方から保証された結果、本人もその気になって、あそこを受けた。その頃にはハクちゃんのことは憶えていても、リンちゃんのことは忘れていたんだけど。まさか当人をレンが連れて来るとは……。中学からなのか、高校からなのか、どっちなんだろう。
そう言えば、ハクちゃんの家は異常に厳しかったはずだ。以前部活のみんなで休憩中に漫画の話になった時、全然漫画を知らなくて「なんで知らないの？」って訊いたら「家で禁止されているんです」って答えたので、みんなびっくりしちゃって。勿体無いよね～という話になって、みんなで漫画を持ち寄って見せてあげたりしたんだ

っけ。姉妹の一人だけ禁止っていうのは考えにくいから、リンちゃんも同じなんだろうな。

あれ……となると、今日、レンがリンちゃんを連れて来たのって、『ＲＥＮＴ』を貸せないからなのかな？　それに、あれだけ厳しい家の子じゃあ、交友関係もきつく制限されている可能性が高い。リンちゃん、今日、どこに行くのか誰にも言ってないんじゃないの？

なんだか、ややこしいことになりそうな気がしてきた。う～、大体こういう予感って、当たるのよね……。とはいえ、私にできることなんて限られている。せいぜい警告と、何かあった時の手助けぐらい。

で、やっぱり気になるのはハクちゃんだ。えーっと、ハクちゃんの連絡先、連絡先……このメールアドレス、まだ使えるのかな。駄目元で送ってみよう。

あの子はカモメ（後書き）

めーちゃんの回想シーンがメインのお話。

自分で書いていてカモメがどっちなのかわからなくなった……もういいやカモメの姉妹ってことで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7794v/

ロミオとシンデレラ　外伝集

2011年9月30日03時25分発行